

ジャワ村落史の検証

——ウンガラン郡のフィールドから——

加納啓良

はじめに

ジャワの村落（デサ）の歴史的起源と社会経済構造の問題は、ジャワがオランダの植民地支配のシステムにいつそう深く組み込まれつつあった19世紀から、農村の社会経済諸制度が国民国家の政治支配体制と国際的な経済的ネットワークの中に緊密に統合された今日に至るまで、高度に論争的な主題を提供してきた。ある論者たちはかつて、ジャワの村落共同体を太古の時代から持続する社会制度として論じたが⁽¹⁾、別の論者たちはそれを、19世紀の植民地支配、とくに1830年代から1870年代にかけての強制栽培制度の時代のオランダの政策の産物としてとらえ、その前植民地的起源を否定した⁽²⁾。ジャワの村落の起源と社会的性格に関しては、上記の両極端の議論の間に、さまざまなタイプの議論が成立しうる。いずれが真実であるにせよ、近代以降の植民地支配のもとで、ジャワの村落が大きな構造的変化を被ってきたことは否定しがたい事実であろう。しかし問題は、いったいどのような類の変化が起きたのか、変化の主たる要因は何であったのか、ということである。植民地的な政治支配と経済的収奪の直接的影響の他に、農村の人口変化や食糧生産農業（とりわけ稲作）の制度的技術的変容などがジャワの村落の変化において重要な役割を演じてきたことも、おおいにありそうなことである。

私見では、この問題に関する充分に説得力ある議論は、今日に至るまで提出されているとは言いがたい。その大きな原因のひとつは、ジャワのどの地域についても、前植民地期を含む長期の期間について特定村落の社会的な変化と持続性を検討するための具体的な素材が得られない、という資料的な制約にある。かりに、個別具体的な村落のレベルでそのような歴史的データが得られるならば、その分析は、上記の問題についての我々の知識を深めるのに大きな助けとなるに違いない。

1986年から87年にかけてオランダでインドネシアの経済史に関する史料調査を行った際に筆者は、この種の研究に有益と思われる史料のひとつを発見する機会を得た。それは、19世紀初めの手書きの文書で、この時期の中部ジャワのスマランとポヨラリの間位置するいくつかの郡 (district) に所属する全ての村落 (史料のオランダ語の表現では、デッサ *dessa* またはヌホレイ *negorij*⁽⁸⁾) の名前を洩らさず列挙しただけの、いたって素っ気ない内容のものである⁽⁴⁾。しかし、筆者の承知するかぎり、この当時の個々の村落名に言及した史料というのは、それだけでも珍しいものであり、まして特定地方の全ての村落をリストアップした文書はきわめてまれである。

この史料に挙げられた複数の郡のなかには、当時 197 の村落を擁したウンガラン郡⁽⁵⁾が含まれている。幸いなことに、この郡については、ジャワの各地方の人口について初期の優れた推計を行ったことで知られるブレーケル (P. Bleeker) が1846年に記録した村落名と人口のリストが残されている⁽⁶⁾。1987年から88年にかけてインドネシアに滞在する機会を得た筆者は、これら2組の19世紀のデータを手掛かりに、かつてのウンガラン郡に相当すると考えられる地域で、村落の名称、位置、人口規模と歴史に関する実地調査を行い、過去約180年にわたる変化の跡を追跡することを試みた。

この論文は、上記の史料調査およびフィールド調査の総括報告と、いくつかの補足的資料をも用いた若干の理論的考察にあてられる。まず初めに、19世紀

の2つの資料に現れた村落名と人口データを紹介し、若干の考察を加える。次に、現在のウンガラン地方の村落と人口の概況をフィールド調査の結果から紹介する。さらに、以上のデータを踏まえて、まず村落名の比較対照の地理的規模の変化について、次いでその人口規模の変遷について考察を加える。これらの分析によって、19世紀初めから今日に至るまでの村落の地理的、人口的規模の変化、行政単位としての再編成の様子がいちおう明らかになる。しかし、この論文ではさらに進んで、いくつかの補足的資料の記述により、土地所有制度と稲作を中心とする農業生産の変化についても言及を試みる。これは、村落構造の変化と人口、経済構造の変化の関連について、今後さらに研究を深めるための足がかりのひとつとするためである。

- 1 例えば次のものは、このような見解を代表する古典的著作のひとつである。N. D. Ploegsma, *Oorspronkelijkheid en economisch aspect van het dorp op Java en Madoera*, Leiden, 1936.
- 2 最近の欧米の研究者たちのなかで、こうした見解を最も端的に表明した著述は、次のものである。Jan Breman, "The Villages on Java and the Early-Colonial State," *The Journal of Peasant Studies*, 9-4 (1982), pp. 189-240. この種の見解に対するインドネシア人研究者の評価は、肯定的なものとするものと否定的なものに分かれる。前者を代表するのは、インドネシア大学の歴史家オンホクハムであり、後者を代表するのは、ガジャマダ大学の歴史家サルトノ・カルトディルジョである。Ongghokham, *The Residency of Madiun: Priyayi and Peasants in the Nineteenth Century*, Ph. D. dissertation to Yale University, 1975. Sartono Kartodirdjo, "Struktur Kekuasaan, Sistem Fiskal dan Perkembangan Pedesaan", Paper presented at the Seminar on "Desa dalam Perspektif Sejarah", 10-11 Feb. 1988, Yogyakarta. なお、日本の研究者たちのなかにも類似の意見の分岐が見られる。19世紀ジャワの土地制度を考察した内藤能房、宮本謙介両氏の見解は、ジャワの村落共同体の前植民地的起源を示唆する結論を含んでおり、同じ史料に依ったかつての筆者自身の論文の含意もこれに近似している。内藤能房「19世紀ジャワの『土地占有形態』再考—ジャワ村落の歴史的性格に関する一考察—」『アジア研究』24-1, 1977年。宮本謙介「オランダ植民地支配とジャワ社会の再編成—19世紀の土地制度

を中心に一」『歴史学研究』497, 1981年。加納啓良「デサ共同体に関する一考察」『アジア研究』22-4, 1976年。これに対して、やはり同じ史料に依る森弘之氏の研究は、(原史料の編者の見解により忠実に)デサの土地共有制の19世紀の起源にウェイトを置いた見解を打ち出し、アジア的生産様式論批判の立場からジャワの村落起源論争に介入を試みた小谷汪之氏も、森氏の主張に依拠して同様の見解を表明している。森弘之「ジャワの『共同的占有』と強制栽培制度」『社会経済史学』41-4, 1976年。小谷汪之『共同体と近代』, 1982年。他方、ベトナム村落の土地共有制研究の立場から発言を試みた桜井由躬雄氏は、逆に宮本氏らの前植民地起源説に共鳴する立場を明らかにしている。桜井由躬雄『ベトナム村落の研究—村落共有田=コンディエン制の史的展開—』, 1987年。また、文化人類学の分野では、中村光男、関本照夫の両氏が、ジャワ社会における「二者関係原理」の優越という視点から、ジャワ村落の植民地支配起源説に親和的な発言を行っている。中村光男「ジャクジャカルタ市コタグデにおける社会人類学的調査の予備報告」『東南アジア研究』10-3, 1972年。関本照夫「村の時間と歴史—ジャワの王国と歴史—」『民族の世界史6 東南アジアの民族と歴史』, 1984年。なお、19世紀以来のこの問題に関する長大な論争史とその評価については、いずれ別の論文(複数)を用意する予定である。

- 3 negorij は、明らかにジャワ語のヌガリ negari (都邑を意味する語ヌゴロ negoro の敬語形)の転訛である。おそらく、各郡のうち、demang, wedana などの称号をもつジャワ人地方官の居住する村落をこのように呼んで、通常の村落(dessa)から区別したものと思われる。しかし、史料のリスト自体には、両者の区別は明記されていない。
- 4 MIKO G-1 No. 110 Kaart 1, Kaarten-collectie, Algemeene Rijksarchief, Den Haag.
- 5 原史料の表記では、District Ngoengroengan。Ngoengroengan は、19世紀の一時期に行われた表記法で、現在では Ungaran という表記が一般化している。以下、この論文では、とくに必要のないかぎり、Ungaran という表現を用いる。
- 6 P. Bleeker, "Fragmenten eener reis over Java: Reis door de binnenlanden van Midden Java," *Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 1850, I, pp.245-273.

I. 19世紀のウンガラン地方

1-1. 19世紀初めの村落名

稿末の付録Aに、すでに述べた史料に現れるウンガラン郡（当時）の197か村の一覧表をアルファベット順に配列しなおして掲げる。参考までに、カッコ内に原史料における記載順序をも併記しておく。綴り字は原史料のままであり、今日のインドネシア語あるいはジャワ語の表記法とはもちろん、19世紀半ば以降のオランダ語の表記法ともかなり異なっている。また、この史料自体のなかでも、表記法が必ずしも一定していないし、誤って記録したと推定されるものも含まれる。いずれにせよ、ここに現れた村落の名称には、語源的な、あるいは語義的な考察への興味をそそるものもあり、そのなかには村の成立の歴史、あるいは地理的な立地要因を示唆するものもある。まず、手元のいくつかのジャワ語辞典などとの対照から推測しうるかぎりでの、各村落名の語義を記しておく。なお、[]内は、現代のジャワ語の表記法による綴りを示し、<印は語の派生関係を示す。

Abblak [ablak または ablah] = 「広く開けた」の意。

Assem [asem] = タマリンドの樹。

Babadang [babadan <babad] = 「切り開かれた土地」の意。

Bandaran (<bandar) = 「水路」または「停泊地」の意。

Bang Lee = 語義不明だが、benglé と同じならば、薬用のイモ類の一種を指す。

Banyoe Kidoel [banyu kidul] = 「南の水」の意。

Banyoe Koelon [banyu kulon] = 「西の水」の意。

Banyoe Manik [banyu manik] = 「珠の水」の意。

Bédjé = béji と同じならば、「池，貯水池」を意味する可能性がある。

Bekakak = 「供え物にされる動物，または人」の意。

Belon [belong] = 「湿田」の意。

Bender Desog Goenoeng [bender desa gunung] = bender は bandar と同じか？ desog は dhésok (ぺちゃんこ) の可能性もある。gunung は「山」。

Bender Doeko Goenoeng [bender dhukuh gunung] = dhukuh は、「派生村」の意。

Bergas Kidool [bergas kidul] = bergas は「見目良い」，kidul は「南」。

Bergas Lor [bergas lor] = lor は「北」。

Bibis = コオロギの一種を指す。

Boeboor [bubur] = 「粥」または「古ぼけてよく見えない」の意。

Branga [branggah] = 「(鹿の角などが) 強くて大きい」の意。

Branjan Jaran = branjan は branjang (砂混じりの粘土) の誤記か？ jaran は文字通りならば「馬」だが，jarang (隙間だらけの) の誤記かも知れない。

Delik [dhelik] = 「隠れ里」の意。

Doeko [Dhukuh] = 「派生村」の意。

Doeko Penkol [dhukuh péngkol] = péngkol は「湾曲した」の意。

Emplag [emplah または emplak] = 「ただっ広い未開墾地」の意。

Gambeer Sawet [gambir sawit] = 樹の一種。

Gebogan [gebugan <gebug] = gebug は「打ちつける」の意。gebog (バナナの樹) の派生語である可能性もある。

Gebook Goenoong [gebug gunung] = gebug または gebog は同上。

Gebook Joerang [gebug jurang] = jurang は「谷間」の意。

Gedang Ganak [gedhang anak] = gedhang は「バナナ」，anak は「子供」。
第V節参照。

Geger Salam [geger salam] = geger は「あわてふためく」，salam は「平

安」の意。

Geger Weroe [geger weruh] = weruh は「知る」。

Gembongang [gembongan <gembong] = gembong は「水をたっぷり注ぐ」の意。

Genook [genuk] = 「(米などを貯蔵する) 小型の甕」の意。

Getas = 「明瞭な、はっきりした」の意。

Gintoengan [gintungan <gintung] = gintung は樹の名。

Goenoong Patie [gunung pati] = 「死の山」の意。

Gowongan (<gowong) = gowong は「王に仕える大工」の意。

Grogol = 棚の一種を指す。

Jati Jajar = 「並んだチークの樹」の意。

Je Manggal [おそろく cumanggal <canggal] = canggal は「枯れ木」。

Kalie..... [kali.....] = 「川」。

Kapoendong poetih [kepundhung putih] = kepundhung は樹の一種。putih は「白い」。

Karaman Goenoeng [kraman gunung] = kraman は「村有田」または「村役人の職田」の意と思われる。

Karang..... = karang は「椰子林」から転じて「集落」の意。

Kawis bolo [kawis bala] = kawis は karang の敬語形。bala は「軍団」「隊列」の意。ただし、Karambola (果物の一種) から転訛した可能性もある。なお、第V節のニャトニョノ村の伝承をも参照。

Ke Boerikan [<burik?] = burik は「あばた」の意。

Kebon Kliwong [kebon kliwon] = kebun は「果樹園, 畑」の意。kliwon はジャワの定期市の週日の一, または「村長」の意。

Kebon Mangis Joera [kebon manggis juran?] = kebun manggis は「マングスティンの果樹園」の意。juran は「ゲームの報償」の意。juran でな

く jurang の誤記とすれば、「谷間」の意。

Kebon Ombo [kebon amba] = 「広い果樹園 (または畑)」の意。

Kebonan [kebunan <bun] = 「露に濡れた」の意。kebon から派生した可能性もある。

KeDompon [kedompon <dompo] = dompo は「かぶせる」の意。

Kemalon [<kemalo] = kemalo は「樹脂」の意。

Kenankan [kenangkan <angka] = angka は「ナンカ」(果物の一種)の意。

Kepoelan [kebulan <pul?] = pul は「親密な」の意。

Kepok = 「せいろ」の類の食器, または「端が切れて終わりになる」の意。

Keyi Joeran Demang [keji juran demang または keji jurang demang] = keji は語義不明だが, 第V節に記すような伝承がある。juran または jurang は, Kebon Mangis Joera の項を参照。

Keyi Mijen Joeran [keji mijén juran/jurang] = mijén は「特命を受けた」の意。

Klayoe [<layu?] = layu は「走る」または「亡くなる」の意。

Kletok [klethuk?] = 菓子などを食べる時に出る音を表す擬音語。

Koentjang [kuncang] = 「叩きつける」の意。

Kolang Kaleng [kolang-kaling] = 砂糖ヤシの実。

KraDinan [<radin?] = radin は「平らな」の意。

Krajan (<raja) = raja は王。krajan は元来「王の居住地, 王国」を意味するが, 転じて村長または地方官の居住地, あるいは複数の派生村 (dhukuh) を従えた中心村を意味する。

Krettek [krettek] = 「橋」の意。

Lahar = 「溶岩」の意。

Larang = 「稀な」「珍しい」「高価な」の意。

Leemboon Kidoel/Lor [limbung? kidul/lor] = limbung は「格闘する」の意。

Lemabang [lemah abang] = 「赤い土」の意。

Lempoejang [lempuyang] = 植物の名。根茎を薬に用いる。

Lepen Sonten = lépén は「川」, sonten は「夕方」を意味する（いずれも敬語形）。

Lerep Demang = [lereb demang] = lereb は「立ち止まる, 宿泊する」の意。demang は地方官の称号の一。

Lollos [lolos] = 「解き放たれる」の意。

Lorg = lorog の誤記。「低地の田」, 「川の流れる先」の意。

Manik Mojo [manik maya] = manik は「珠, 宝石」, maya はブリンビ（果物の一種）の花を意味する。

Miejen Doeko [mijén dhukuh] = mijén は「特命を受けた」, dhukuh は「派生村」の意。

Moending [mundhing] = 「水牛」の意。

Nogo Sarie [naga sari] = naga は「竜」, sari は「花」「花芯」「核心」の意, 転じて「(花のように)美しい」の意にもなる。

Padang [padhang] = 「明瞭な」「明るい」の意。転じて「既に切り開かれた土地」を意味する。

Pakalongan Koelon/Wetan [pakalongan kulon/wétan, <kalong?] = kalong は「こうもり」の意。

Pakintellan [pakintelan, <kintel] = kintel は蛙の一種, または「固く閉じる」の意。

Pakoentjeng [pakuncén <kunci] = kunci は「鍵」の意。pakuncén は、「陵墓や聖地の管理を委任された村」を指す。

Pala Langang [palalangan, <lalang] = lalang は「アランアラン」(チガヤ

に似た雑草)の意。

Pandeang [pandhéan, <pandhé, または pandekan, <pandek] = pandé は「鍛冶屋」, pandek は「村役人に奉仕する下僕」を意味する。

Pedag Pajoon Wetan [pedhak payun wetan?] = pedhak は「近い」, payun は「屋根の葺き板」を意味するが, payung (傘)の誤記かも知れない。

Penkol [péngkol] = péngkol は「湾曲した」の意。

Pesewan (<séwa) = séwa は「賃貸借」の意。

Petoong [petung] = 「大きな竹」の意。

Pieyer [pijer] = 蝶の一種, または樹脂の一種を意味する語。

Pilahan Goenoeng [pilahan gunung] = pilahan は「孤立した場所, 物」の意。従って, pilahan gunung は「山奥の村」の意と解される。

PoAren [paren] = 語義不明だが, arén (砂糖やし), または paré (苦瓜) から派生した可能性あり。第IV節の伝承をも参照。

Poetattan [putatan <putat] = putat は樹木の一種。

Pontjol [poncol] = 「片隅」の意。

Randoe Goenting [randhu gunting] = randhu は「カポック」, gunting は「鋏」の意。

Rawie Tenga [rawi tengah] = 「真ん中の湿地」の意。

Rembel [rémbél] = 「密集し混み合う」の意。

Rowo [rawa] = 「湿地」「沼」の意。

Sabrangang [sabranagan] = 「(川などを) 渡る場所」の意。

Sekoeneer [<kunir?] = kunir は「うこん」(ターメリック)の意。

Selo Gemoeloong [selo gemulung] = 「ごろごろ転がる石」の意。

Semboenang [<sembung?] = sembung は植物の名。

Sendangan [<sendhang] = sendhang は「泉」の意。

Sentonno [sentana] = 「貴族の一族郎党」, また転じて「村長の一族郎党」を

指す。

Sigoogt [sigug?] = sigug は「扱いにくい」の意。

Sirotto/Sroto/Srotto [srota?] = srota は「耳」の意。

Teedjo Krajan [téja krajan] = téja は「虹」の意。

Tegal Melik = tegal は「畑」, melik は「鉱石を掘る」の意。

Tiego Werno [tiga werna] = 「三色」の意。

Tjandie [candi] = 「ヒンドゥー寺院」の意。

Tjempo Goenong [cempa gunung] = cempa は「短い」, gunung は「山」の意。

Tjerbonang [carubanan? <caruban <carub] = caruban は「(道などが)一堂に介する場所」の意。

Tjienkrengan [cingkrengan <cingkreng] = cingkreng は、「掌を何度も返す」の意。

Toog Marang [tug marang] = tug は「～まで」, marang は「刀(parang)で切る」の意か。

Troeko Kidol/Lor [truka kidul/lor] = truka は「新開地」, kidul は「南」, lor は「北」の意。

Waroe Dojong [waru dhoyong] = waru は樹木の名。dhoyong は「傾いた」の意。

Winong Lor = winong は樹木の名。

Woejel [wujil] = 「小人」の意。

Wonno Sarie Koelon/Wetan [wana sari kulon/wétan] = wana sari は「美しい森」の意。

長々と語義の講釈を試みたが、以上からは、当時の村の地名の名づけかたに、次のような共通パターンが存在したことが分かる。第一は、その土地の地形や

自然地理的特徴を示した地名である。その中には、その土地が新開地であることを示したものや、湿田の所在地であるなど耕地の特徴を表現したものも含まれる。このカテゴリーに分類できる村落名はおよそ40から50に及ぶ。典型的なものとしては、Abblak, Babadang, Belon, Emplag, Kebon Ombo, Lahar, Lemabang, Lorg(Lorog), Padang, Rowo, Selo Gemoeloong, Sendanganなどを挙げる事ができる。第2は、その土地を特徴づける動植物などの名をあてた地名である。この類の村落名は、20数か村に及ぶ。代表的なものとしては、Assem, Jati Jajar, Kapoendong poetih, Kenankan, Kolang Kaleng, Moending, Poetattan, Waroe Dojongなどが挙げられる。第3は、その村の成立に関するいわれを示したと推測される地名である。その数は20か村前後になる。代表的なものは、Bandaran, Gowongan, Kraman Goenoeng, Krajan, Lerep Demang, Miejen Doeko, Pekoentjeng, Sentonno, Tjandieなどであろう。以上のいずれにも分類困難な村落名は、全体の半数前後に達する。これらは、語義そのものが不明であったり、かりに語義が分かっても、何ゆえそのような語が選ばれたのか推測が困難なものが大半を占める。これは、例えば日本の地名、村名の場合と引き比べてみても、さして異とするに足りない。

ところで、第1、第2のカテゴリーに属する村落名が多いことは、王権や植民地権力の意図や政策とは関わりなしに、いわば自然発生的に形成された村落が多いことを示唆しているように思われる。第3のカテゴリーの場合にも、そのような政治的起源を感じさせる村落名は、Gowongan(大工の村)、Karaman Goenoeng(山中の村有田、または村長職田)、Krajan(説明済み)、Pakoentjeng(同上) Sentonno(貴族または村長の一族朗党の村)など、比較的少数のものに限られる。ここで、とくに興味深いのは、クラジャン(Krajan)と名のつく村がKrajanおよびTedjo Krajanの2つに限られることであろう。このうち前者は、明らかにウンガラン郡の郡長居住地であったウンガラン村(desa Ungaran)それ自体を指している。これを、後で検討する現代の集落名と比べ

てみると、後者では Krajan の名をもって呼ばれる集落が著しく増えていることが注目される。このことの意味については、後で検討することにしよう。

1—2. 19世紀半ばの村落と人口

1846年にオランダ人官吏 P. ブレーケルは、スマランを出発点として中部ジャワを一巡する視察旅行を行い、各地の状況や人口に関する記録を残した。この紀行記録の冒頭部分では、スマランからウンガランへかけての旅路のありさまが描写され、ウンガラン郡に属する村落の名称と、各村の人口についてのデータが一覧表に整理されて掲示されている。最初に、当時のウンガラン郡近辺の様子を知るために、旅路の様子を描いた部分を訳出しておこう。

まずブレーケルは、「中部ジャワの内陸部は、スマランを出発点とし、スラカルタ、マディウン、クディリとともに、スマラン、ケドゥ、ジョクジャカルタ、バグレン、パニユマスの各理事州に広がる大道路網によって覆われている。……全ての小動脈へと導く大動脈は、スマランからウンガラン Ngoengroengan (Oenarang) への大通りである」⁽¹⁾と述べて、ウンガランが中部ジャワにおける陸上交通の要地に位置することを指摘している。北海岸の首都スマランから中部ジャワの内陸部各地へ延びる道路網の関門としてのウンガランの戦略的位置は、今日でも同様である。さらに彼は、スマランからウンガランへ至る道筋の様子を、次のように精彩ある筆致で描いている。

「ウンガランへの大通りは、スマランの町の東部から南へと始まる。……首都の南へその距離 (3.5パール)⁽²⁾まで沖積平野が続いたのち、道はウンガランの前山にかかる。この前山の麓には、多数の中国人墓地と、中国人の施療院、救貧院が見られる。丘への登り道は急傾斜のため、スマランから里程4パールに達する前からすでに、いくらか重い荷物を背負わせるために、水牛を用いることが必要になる。道は、じきに海拔数百フィートの高さにまで達する。」

「道から見下ろす景色は魅惑的である。水田を開くには不向きであり、まば

らな雑草や藪に覆われているとはいえ、一面に果樹林を造成するのに役立てることは可能な、柔らかい丸みを帯びた丘の頂きの間には、なだらかな谷間が広がり、そこでは、素朴で純情なジャワ人たちが、椰子やマンゴーやその他の果樹や竹林に、そしてそれが可能なところでは水田や畑 (tipar) や菜園にも囲まれて、粗末な竹の小屋を住みかとしている。また、ここかしこでコーヒーの栽培地にも遭遇するが、見晴らしの効くところでは、ウンガラン山の低いスロープが快適な休憩地を提供してくれる。このような景色が、ウンガラン村 (dessa Oenarang) の手前までの地域一帯で交互に続くが、やがて海拔高度が上がり奥地に入り込むと、もっと美しい自然の景観がそれにとって代わる。」

「スマランとウンガランの間は、物産の輸送の時期には、信じられないほどの喧騒に包まれる。ヨーロッパ市場への貨物を積んだ何千頭もの馬や牛が、見通せないほど長い列を作って、スマランへと行き来する。何千人もの歩行者が、あるいは牛馬に付き添い、あるいは自分たちの勤労の成果をあちこちの村や市場に運ぶために、街道を往来する。大がかりな輸送の隊列も荷車を牽いて休みなく行き交う。」

「スマランとウンガランの間には、スロンドル (Serondol) 郡のチェティンガレー (Tjetingaleh)——里程 5 パールに所在——と、バニユマニク (Banyumanik)——里程 8～9 パール——の 2 個所にしか、宿駅 (poststation) は存在しない。いずれもウンガラン山に源をもついくつかの小さな川が、道と交差する。頑丈なチーク材製の、あるいは若干の鉄製の橋が、これらの小川に架けられ、通行を容易にしている。ボノット (Bonnot)——スマラン郡とスロンドル郡の境にある——とカンジョン・アノック (Kandjong anok)——里程 7～8 パール——に近づくまでは、さほど重要な村は通過しない。」⁽³⁾

上の記述からは、強制栽培制度全盛期のこの時代に、ウンガランからスマランへの街道筋が、すでに輸出向けの農産物の搬送路としておおいに賑わっていたことが知られる。次いで、彼はウンガラン自体の様子を次のように記してい

る。

「ウンガラン (Ngoengroengan) は、13パールの地点にある大通り沿いの、人口の多い村である。この村は、ウンガラン山の頂上の北東山麓の、海拔約1,000 フィートの丘陵地帯の盆地に位置している。そこからは、ムルバブ (Merbaboe) 山⁽⁴⁾の頂上が南南東の方角に見える。村には、およそ1,800人のジャワ人と、若干の中国人、ヨーロッパ人が住んでいる。それは、サラティガ県 (rongoschap Salatiga) に属するウンガラン郡 (distrikt Oengarang) の首都であり、郡長 (wedono) の居住地になっている。そこには、官吏の公用宿舎 (pasangrahan) とともに、ヨーロッパ人旅行者のための小さな旅館がある。すでに約1世紀前に、ウンガランはかなり人口の多い村であった。ヴァレンティン (Vallentijn) は、前世紀初めのこの村の人口を、500世帯と推計している。当時、住民たちはくまなく、宿舎、食物、飲料の無償提供など、スフナンへの貢納を義務づけられており、その代わりに、他のいっさいの負担を免除されていた。1786年には、ここに小要塞が設置され、今日も現存している。それは大通りに直接面しており、石の壁と2つの稜堡を備えている。つい最近まで、ここには30人の守備隊が駐屯していた。同時にそれは、スマラン、ウィレム1世 (Willem I)⁽⁵⁾、サラティガの病気回復期の兵士たちの仮駐屯地としても使用されていた。ウンガランの健康的な気候、上記の大駐屯地に隣接した好立地、病気回復期の兵士たちの一時的滞在がもたらす好結果などが、この要塞の運命を変え、療養兵士の部隊編制をもたらすとともに、慢性疾患の当地での適切な治療をも可能にしたのであった。私が1846年のジャワ旅行に際して同行した公衆衛生部長のボス (Bosch) 博士は、里程16パールに所在するカリ・アラン (Kali-alang) 村あたりを、慢性病患者と病気回復期の兵士たちの大部隊を受け入れるのに最適の場所として、以前から注目していた。おそらく、その設立に要する膨大な経費のために、この計画は修正され、必要な改造を施したのちに現存のウンガラン要塞が医療施設として転用されることになったのである。

私の得た情報に誤りがなければ、当時そこには70人の患者たちが収容されており、東インド軍軍医の規則的治療と監督のもとに置かれていた。ウンガラン郡は、ウンガラン山の北東麓と前山の一带を占め、1847年には、ヨーロッパ人23人と中国人154人を含む21,000人の人口を擁していた。当時同郡は、以下に掲げる人口と牛馬を保有する90の村落から成っていた……」⁽⁶⁾。

この記述からは、ウンガランが東インド会社時代から交通、軍事上の要地であり、18世紀まで同地には、マタラム国王（ススフナン）の支配が強く及んでいたことが確認される。またここで援用されたファレンテインの記録からは、18世紀にすでに、ウンガランが大規模な集落を形成していたことが窺われる。

ほぼ同じ時期のウンガランについては、1851年に刊行されたファン・デル・アアの著作と、1869年に刊行された『蘭印地理・統計辞典』にも、断片的ながら興味ある記述が残されている。まず、ファン・デル・アアの記述は次のとおりである。

「ウナラン (Oenarang) またはウンガラン (Oengaran) の村は、スマラン県 (het regentschap Samarang) の一郡の首都でもあり、スマランとサラティガの間、スマランから13 $\frac{1}{2}$ パールの距離の、同じ名前前の山に隣接する谷間に位置している。当地はスマランよりもずっと高い場所にあり、その高度差は、ファン・ウェイク (van Wijk) によれば300ヤード、ユングフーン (Junghuhn) によれば337ヤードである。

村は、ジャワのどこでも見られるように、ココ椰子の木々と他の果樹に隠されたいくつもの茅屋から成り、小さなヨーロッパ式の要砦がこれに隣接している。レンガ製の四稜構造の建築で、古の東インド会社の領土境の砦であったこの要塞には、1757年の年号が記され、土塁をめぐるし、2門の大砲と小規模な守備隊が置かれている。」

「1827年5月28日の朝、ウナランは大火に見舞われた。デマン (demang) の家とマス・ロンゴ (Maas-Ronggo) の家が、他の35軒の家屋とともに灰塵に

帰したが、ムスジッドと新築されたばかりの兵舎は、幸い難を免れた。火は、住人たちが新年に際して彼らの祖先の墓に一斉に詣で、老人や体の弱い者や子供たちの全てがあとに残されていた時刻に発見された。銀髪のマス・ロンゴ・ルクソ・ヌゴロ (Maas-Ronggo-Rekso-Negoro) もまた、高齢と弱体のために逃げ出すことができず、すんでのところでのこの致命的な事件の餌食になるところであったが、すでに以前にも驚嘆すべき方法で死を免れたのと同じく、このときにも偶然の事情によって命拾いをしたのである。何年も前まだカリウンゴ (Kaliwoengo) に住んでいた時分に、ある日彼は、全くひとりでマンカン (Mankang) の森を馬で通り過ぎているときに、思いがけずも一匹の虎に飛びかかられたのであった。虎は、そのような遭遇に全く備えていなかった馬の乗り手を引きずり降ろし、深い森の中に引っ張り込んだ。最初の恐怖から気を取り直し、怪獣の爪の下で彼を待ち受けている運命を完全に悟ったロンゴは、一本のクリス〔刀身が蛇のように波打ったジャワの短刀——筆者〕を携えていたことを思い出し、冷静沈着にも、自由なまま残されていた右手でそれを、獣の肩の骨から喉へと繰り返し突き立てた。虎は、苦痛と憤怒から唸り声をあげて獲物を離し、わずかに離れたところで事切れて倒れるのが見てとれた。一方、ルクソヌゴロは、あちこちから血を流しながらも、近くの村までたどり着くだけの力を残していた。」

「1847年2月18日の晩から、ウナランを首都とする郡では激しい嵐が荒れ狂い、2昼夜も続いた。この嵐は、コーヒーの農園に甚大な被害をもたらした。

ウナランの北側は丘陵地帯であるが、南側はかなり平坦である。南側にはバウエン (Bawen) という小集落があり、そこで道は分岐する。そこでこの集落は、タンガン・ティガ (Tangan-tiga) つまり『三つの手』とも名付けられている。」⁽⁷⁾

この記述で興味深いのは、1827年の火事についての部分である。ここで demang と記されているのは、おそらく郡長のことであろう。マス・ロンゴ・

ルクソ・ヌゴロなる人物は、ronggo の称号を冠せられていることからみて、demang よりも高位の退役地方官であろうと推測される。オランダ人の被害は全く記されていないのに、彼と demang の家は、一般住民と同じく灰塵に帰したこと、身分の高い人間であるにもかかわらず、かつて従者も連れずに森の中を馬で通行したり、火事の際にひとりで災難に対処しなければならなかったように記されていることなどから考えて、彼らの暮らしぶりというのは実際にはかなり質素なものであり、庶民から社会的に隔絶した暮らしを営む存在ではなかったのではないかと想像される。にもかかわらず、常人から卓越したある種の超能力の保有によって特別な存在として意識されている点は、ある種のカリスマ性の保有が地方支配者の要件でもあったことを示唆している。また、火事の際に老人と子供以外の住民が年始の墓参りに出掛けていたという記述は、村の草分けに対する一種の祖霊崇拜の慣行がこの時代には維持されていたことを物語る。

次に『蘭印地理・統計辞典』の記述は、以下のとおりである。

「[Oengaran は] Oenaran と誤記されることもある。スマラン理事州サラティガ県 (afdeeling Salatiga) の一郡。ウンガラン山の北東山麓と前衛丘陵地帯を占め、人口19,723人を擁する。この地は、米とヨーロッパ市場向けのコーヒーを産する。」

「同名の首都は、スマランからスラカルタに向かう郵便道路沿いの、スマランから13パール、サラティガから18パール、プルウォダディから53パールの距離にあり、ウンガラン山の北東麓に位置する。ここには要塞があり、ユーレンベック (Uhlenbeck) によれば、海拔は997フィートに達する。そこには1,800人のジャワ人と、若干のヨーロッパ人、中国人が居住している。ここは郡長 (onderregent) の居住地であり、公用宿舎 (pasanggrahan) 1棟と一般旅行者用の小さな旅館1軒、それにひとつの製糖工場が存在する。上記要塞は、1849年に、衛生将校1名 (een Officier van Gezondheid) の駐在する保養所

(convalescentenhuis) に転用された。この要塞は、もともと1787年に建設されたもので、1811年には打撃を被ることなくイギリス人に接收された……」

「ウンガラン山群は、当郡と、ケンダル県 (regentschap Kendal) のボージャ (Bodja) 郡とにまたがっている。ウンガラン山は南緯7度8分、東経110度24分30秒に位置する死火山である。山麓はトウモロコシ (Turksche tarwe) の畑に覆われている。肥沃な土壤をもつこの山は、中腹2,500 ラインランド・フィート⁽⁸⁾の高さまでは、全山草と藪が繁茂している。山群の頂をなすコペン (Kopeng) 峰またはガジャ・ムンクル (Gadjah Moengkoer) 峰(6,790 ラインランド・フィート), スモウォノ (Soemowono) 峰 (約5,690 ラインランド・フィート), スロロヨ (Soerolojo) 峰 (6,552 ラインランド・フィート) は、いずれも樹高が高く密生した森林に覆われている。ウンガランにはいくつかの遺跡とゴンドリア村 (het dorp Gondaria) 付近の温泉1箇所が見出される。遺跡は、スモウォノ峰の南東麓3,000 ラインランド・フィートの高さの傾斜地に存在する9つの寺院から成る⁽⁹⁾。そこには、これらの寺院に供えられた石像も散乱している。これらの寺院からほど遠からぬところには、テロゴ・ニポ (Telogo Nipo), スンブル・カメン (Soember Kamen), スンブル・ゲドン (Soember Gedong) の硫黄泉も存在する。」⁽¹⁰⁾

ここで注目されるのは、ウンガラン郡が米とコーヒーの産地と記されていること、ウンガラン山の土壌が肥沃であり、その山麓はトウモロコシ畑で覆われていると述べられていること、などである。このことの意味については、後の第八節で触れることにしよう。さて、寄り道はこの程度にして、プレーケルの掲げた村落とその人口に関するデータを見ることにする。

付録Bが、プレーケルの表⁽¹¹⁾をアルファベット順に配列し直したものである。この表に現れた村落の総数は90であり、先ほど見た19世紀初頭の史料の村落数の半分以下に過ぎない。このことは、19世紀初めから1846年までの40年余りの間に、多数の村落が統合され行政区分としての村落の数が整理されたこと

表1 1846年の村落と19世紀初めの村落との対照表

1846年の村落	19世紀初めの村落	1846年の村落	19世紀初めの村落
Ampel gading	なし	Lemmattang	なし
Babadan	Babadang	Moending	Moending
Banglee	Bang Lee	Moeneng	なし
Banjoemanik koelon	Banyoe Manik	Moental	Moental Doeko
Banjoemanik wetan	同上	Mroenten	Maroeten K./ W.
Begadja	PegaJa	Ngidjo	なし
Bekakak	Bekakag	Ngroengroengan	Krajan
Bekanang	Berkanang	Njatnjono	なし
Bender	Bender Desog G.	Padompon	Kedompon
	Bender Doeko G.	Pakintelan	Pakintellan
Bergas kidool	Bergas Kidool	Pakoentjen	Pakoentjeng
Bergas lor	Bergas Lor	Pakoetan	なし
Beroet	なし	Pandegan	Pandegang
Blanten	Blanten	Pareng	PoAren
Boeseikan	なし	Patemon	なし
Brangdjang	Branjan Jaran	Pekalongan	Pakalongan K./ W.
	Branjan Jaran L.	Pilahan	Pilahan Goenoeng
	Branga	Pingkoel goenoeng	Penkolまたは Penkol Mijen
Branggah	Dersoeni G./ J.		
Dessoenie	Diwag	Pingkol goenoeg	同上
Diwak	Jati Jajar	Plalangan	Pala Langang
Djatiadjajar	Jatie Sarie	Poedak paijong koelon	なし
Djatisahari	Jelok	Poedak paijong wetan	Pedag Pajoon Wetan
Djelok	なし	Poetatan	Poetattan
Djeroek wangi	Dliwang	Poetri	なし
Dliwang	Waroe Dojong?	Randoe goenting	Randoe Goenting
Doijong	Geboegan	Rowo(Ngrowo)	Rowo
Geboegan	Gebook G./ J.	Sekaran koelon	なし
Geboek	Gedang Ganak	Sekaran wetan	なし
Gedang anakh	なし	Sendangan	Sendangan
Gedawang	Gembongang	Sewakoel	Sewakoel
Gembongan	Genook	Sigoek	Sigoogt
Genoek	Geger Weroe	Sirep	なし
Gerwerroe	Gientoengan	Soemoer djoerang	Soemoer Joeran
Gintoengan	Goenoong Patie	Soemoer goenoeng	Soemoer Goenoeng
Goenoeng pati	なし	Soesoekan	Soesoekan
Gogik	Kali Alang	Sokoo	Soko
Kali alang	なし	Sroemboong	Sroemboong
Kali boetak	Kali Dodol	Sroewen	Sroewen
Kali dodol	Kali Kassir	Tegal gawak	なし
Kali kassir	Kali Poetjang	Terwidie	Terwidie
Kali poetjang	なし	Tjandi	Tjandie
Kali sahan	なし	Tjanggal	Je Mangal
Kalisidie	Karang goenoeng?	Tjimanga	なし
Karang gening	Kebon Kliwong	Troeko	Troeko K./ L.
Kebon kliwoon	Keyi J. D./ J. P.	Woedjil	Woelij
Kedjie	Keyi Mijen J.	Wonosahari	Wono Sarie K./ W.

を示唆している。もっとも、19世紀初めのウンガラン郡とブレーケルが記録した1846年のウンガラン郡の地理的境界が一致しているかどうかは、いずれの史料からも直接には判別できない。しかし、表1のように両者の対照表を作って整理してみると、1846年の90か村のうち68か村までは、対応する名称の村落を19世紀初めのリストから拾い上げることができる。40数年の間には、村の名称の変更もあったであろうことを考慮すると、少なくとも、1846年のウンガラン郡の大部分の地域は19世紀初めのウンガラン郡にも含まれていた、と推定して差し支えないであろう。また、Bender, Brangdjang, Dessoenie, Geboek, Kedjie, Mroenten, Pekalongan, Troeko, Wonosahari などの村の例は、この40数年の間に複数の村がひとつにまとめられたことを明瞭に示している。これらを考え合わせると、1800年から1840年代半ばまでの比較的短い期間に、この地域では相当に大規模な行政単位としての村落合併が行われたと結論することができる。この点を考慮して、以下この論文では、19世紀初めの村落を「古村落」、19世紀半ば以降今日まで行政単位として現れる村落を「行政村落」と呼んで区別することにする。

付録Bの人口データからは、これ以外にも多くのことを推論することができるが、それについては、第VI節で触れることにする。

- 1 P. Bleeker, "Fragmenten eener reis over Java: Reis door de binnenlanden van Midden-Java," *Tijdschrift voor Nederlandsch Indië*, 1850, I, p.245.
- 2 1パール (paal) は、およそ 1.507 km に相当。
- 3 *Ibid.*, pp.246-248.
- 4 ウンガランの南南東30数kmのところにある休火山、海拔3,142メートル。
- 5 アンバラワ (Ambarawa) に設けられていた要塞の名前。
- 6 *Ibid.*, p.248.
- 7 A. J. van der Aa, *Nederlands Oost-Indië, of beschrijving der Nederlandsche bezittingen in Oost-Indië; Beknopt overzicht van de vestiging en uitbreiding der magt van Nederland aldaar*, Vol. III, Amsterdam, 1851, pp.385-386.

- 8 1 ラインランド・フォート (Rijnlandsche voet) は0.314メートルに相当。
- 9 ウンガラン山の南西麓にあるいわゆるゲドゥン・ソンゴ (Gedung Sanga) 遺跡群を指す。本稿で扱う19世紀初めの、また今日のウンガラン郡の領域外に位置する。
- 10 *Aardrijkskundige en statistisch woordenboek van Nederlandsch Indië*, Vol. II, Amsterdam, 1869, pp.592-593.
- 11 P. Bleeker, *op. cit.*, p.249.

Ⅱ. ウンガラン地方の村落, 人口の現況

2-1. 旧ウンガラン郡地域の推定

前節で述べた19世紀初めのウンガラン郡 (District Ungaran) の地理的境界については、これまでのところ確かな情報は入手できていない。当時の境界が今日のウンガラン郡 (Kecamatan Ungaran) の境界とはきわめて異なっていた可能性は高い。前記の一覧表に記載された村落のうちのあるものは今日のウンガラン郡の域外に存在したかも知れないし、逆に今日のウンガラン郡の村落のなかには当時のウンガラン郡の域外に位置するものもあるかも知れないからである。従って、当時と現在の状況を正しく比較するためには、19世紀初めのウンガラン郡の地理的範囲を、なんらかの方法であらかじめ推定、復元する作業が必要になる。

この作業にもっとも役立つ資料のひとつは、1960年代に米空軍の協力のもとに作成され、インドネシア政府鉱業省からコピーが公開、販売されている5万分の1地形図である。この地形図はジャワ全島を網羅しているが、そのうち「南スマラン」(South Semarang), 「アンバラワ」(Ambarawa)の2葉が、推定される地域の全体をカバーしている。これらの地形図には、主な集落(行政村落とは一致しない)の所在と名前が記入されているので、これらの集落名

表2 現在の行政村落と1846年の村落の対照

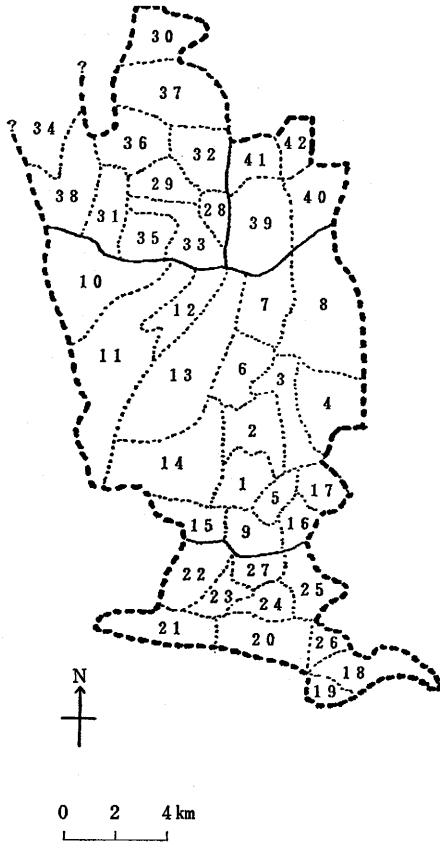
現 在	1846年	現 在	1846年
KC. UNGARAN		KC. KLEPU (続)	
Kl. Bandarjo	なし	Ds. Munding	Moending
Ds. Beji	なし	Ds. Pagersari	なし
Ds. Branjang	Brangdjang	Ds. Randu Gunting	Randoe goenting
Kl. Candirejo	Tjandi	Ds. Wujil	Woedjil
Kl. Gedanganak	Gedang anakh	KC. GUNUNGPATI	
Kl. Genuk	Genoek	Kl. Cepoko	なし
Ds. Gogik	Gogik	Kl. Gunungpati	Goenoeng pati
Kl. Kalirejo	なし	Kl. Mangunsari	なし
Ds. Kalisidi	Kalisidie	Kl. Ngijo	Ngidjo
Ds. Keji	Kedjie	Kl. Pakintelan	Pakintelan
Kl. Langensari	なし	Kl. Patemon	Patemon
Ds. Lerep	なし	Kl. Plalangan	Plalangan
Ds. Leyangan	なし	Kl. Sekaran	Sekaran k./w.
Ds. Nyatnyono	Njatnjono	Kl. Sukorejo	なし
Kl. Sidomulyo	なし	Kl. Sumurgunung	Soemoer goenoeng
Kl. Susukan	なし	Kl. Sumurjurang	Soemoer djoerang
Kl. Ungaran	Ngoengroengan	KC. SEMARANG SELATAN	
KC. KLEPU		Kl. Banyumanik	Banjoemanik k./w.
Ds. Bergas Kidul	Bergas kidool	Kl. Gedawang	Gedawang
Ds. Bergas Lor	Bergas lor	Kl. Pudakpayung	Poedak pajoon k./w.
Ds. Diwak	Diewak	Kl. Pedalangan	なし
Ds. Gebugan	Geboegan		
Ds. Jatijajar	Djatidjadar		
Ds. Karangjati	なし		

(注) : KC.=kecamatan (郡), Kl.=kelurahan, Ds.=desa.

と19世紀初めの古村落名を比較対照して、古村落に対応すると考えられる集落の散在する範囲を探り、この範囲をカバーしている行政村落の境界の外郭をつないでいくことによって、旧ウンガラン郡の範囲を復元することにした。この作業の結果が図1の概略図である。

図1 旧ウンガラン郡域概略図

A 現在の行政村境



KC. UNGARAN

1. Kl. Candirejo
2. Kl. Genuk
3. Kl. Sidomulyo
4. Kl. Kalirejo
5. Kl. Gedanganak
6. Kl. Ungaran
7. Kl. Bandarjo
8. Kl. Susukan
9. Kl. Langensari
10. Ds. Branjang
11. Ds. Kalisidi
12. Ds. Keji
13. Ds. Lerep
14. Ds. Nyatnyono
15. Ds. Gogik
16. Ds. Beji
17. Ds. Leyangan

KC. KLEPU

18. Ds. Jatijajar
19. Ds. Randu Gunting
20. Ds. Bergas Kidul
21. Ds. Munding
22. Ds. Gebugan
23. Ds. Pagersari
24. Ds. Bergas Lor
25. Ds. Karangjati
26. Ds. Diwak
27. Ds. Wujil

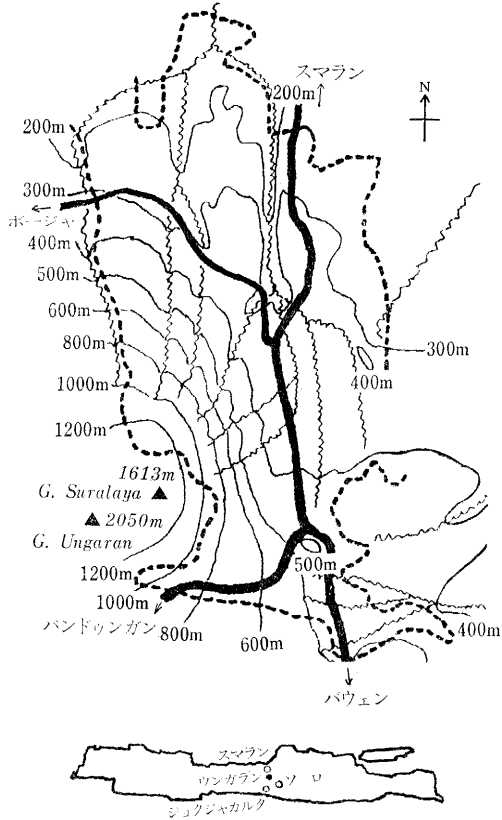
KC. GUNUNGPATI

28. Kl. Pakintelan
29. Kl. Mangunsari
30. Kl. Sukorejo
31. Kl. Plalangan
32. Kl. Patemon
33. Kl. Sumurjurang
34. Kl. Cepoko
35. Kl. Sumurgunung
36. Kl. Ngijo
37. Kl. Sekaran
38. Kl. Gunungpati

KC. SEMARANG SELATAN

39. Kl. Pudukpayung
40. Kl. Gedawang
41. Kl. Banyumanik
42. Kl. Pedalangan

図1 (続) 旧ウンガラン郡域概略図
B 地形図



この図から分かるように、旧ウンガラン郡の範囲は、現在のスマラン県 (Kabupaten Semarang) 内のウンガランおよびクレプ (Klepu) の2郡、スマラン市 (Kotamadya Semarang) 内のグスンパティ (Gunungpati) および南スマラン (Semarang Selatan) の2郡、計4つの郡にまたがっている。この域内に所在する現行の行政村落の数は、ウンガラン郡17、クレプ郡10、グスン

パティ郡11, 南スマラン郡4, の計42か村となる。これを、先の1846年の行政村落と対照させると、表2が得られる。表中、Kl.(=クルラハン)とあるのは、地方行政の上で「都市部」に属するとされている村落、Ds.(=デサ)とあるのは、「農村部」にあるとされている村落のことである⁽¹⁾。

この表から分かるように、現在の42か村のうち28か村は、名前が1846年の村落のいずれかに対応している。1846年の村落のうちに該当村が見られない残り14か村についても、うち Bandarjo, Beji, Lerep, Susukan, Karangjati の5か村は、付録Aの19世紀初めの村落リスト中の Bandaran, Bedje, Lerep Demmang, Soesoekan, Karang Jatie の5村落に名前が対応する。他の9村のうち、Kalirejo, Langensari, Sidomulyo, Pagersari, Mangunsari, Sukorejo の5村は、語尾に -rejo (平和で繁栄した, の意), -sari (花のように美しい, の意) あるいは -mulyo (気高い) という地名新造の際の現代的常套句である接尾語が付けられていることから、比較的新しく作られた地名であることが分かる。また、後に明らかにするように、これら新たに命名された行政村落の場合にも、その域内の集落には、古村落の名称を今日まで踏襲しているものが少なくない。従って、これら現在の行政村落の場合も、19世紀初めの古村落や19世紀半ばの行政村落との系譜的關係は、かなり明確に認められる、と言ってよい。しかし、ここではむしろ、その総数がわずか42か村と、19世紀初めの古村落197か村と比べれば無論のこと、1846年の行政村落90か村と比べてみても激減していることに注目したい。Sekaran, Banyumanik, Pudakpayung の3村の例からも分かるように、今日の行政村落は、19世紀半ばの行政村落をさらに統合して広域化されているものが多いのである。

そこで、次項ではこれらの行政村落よりも下位に位置する集落の名称と旧村落の名称との対応関係を論じるが、それに先立ち、この旧ウンガラン郡の現在の様子を、筆者自身の現地での観察にもとづいて、先のプレーケルらの描写と類似の筆法で書き留めておくことにしたい。

中部ジャワの州都スマランからウンガランへの道は、市街の中心から南へ、つづら折りの坂を登ることによって始まる。もちろん、今日ではこの坂を登るのに水牛の力に頼る必要はなく、自動車は、アスファルト舗装の道路をエンジンを吹かしながらまたたく間に高度を挙げていく。かつてブレーケルが中国人墓地や救貧院の存在を記した丘の麓の一角は、今日ではすでに市街地の一部に変わっている。坂を登っていくと、北にスマランの市街とジャワ海の広大な展望が得られるようになり、道はやがて、樹々の繁る丘陵上の台地の上を走るようになる。このあたりは、スマラン市内でも指折りの高級住宅地である。しばらく行くと道の両側の景観は、ブレーケルが記したような「まばらな雑草や藪に覆われた」なだらかな丘陵や台地のそれになる。右前方には、ウンガラン山の美しい姿が次第に大きく見えてくる。やがて、行政上はなおスマラン市内（南スマラン郡）に属するスロンドル（Sronдол）のあたりで、数年前から建設中の、市街中心をバイパスする高速道路が合流する。この高速道路は、いざうんガランを通過して、ソロ方面へ延長される予定になっている。

高速道路の合流点から南へわずかに走ると、そこはもう旧ウンガラン郡の北端である。道はまず、バニユマック（Banyumanik）、プダックパユン（Pudakpayung）の2村を通過する。もっとも、「村」と言ってもこの辺はすでに都市化が進み、かつてブレーケルが描いたような素朴な村落のたたずまいは見られない。道はなだらかな丘陵地の背にあたる部分を、ゆるやかに高度を上げながら南に走り続ける。道の西側1キロメートルほどのところを、ウンガラン方面から流れてくるガララン川（Kali Garang）が並行しているのだが、その様子は道から窺えない。尾根上に位置するために、今日でも道沿いには水田は全く見られない。このあたり、道の西側には中部ジャワ駐屯の陸軍ディポスゴロ師団の司令部と関連施設が置かれている。

間もなく道は、現在のスマラン県ウンガラン郡内に入る。最初に通過するのはバンドルジョ（Bandarjo）村である。この村の中程で、道は南西方向に湾曲

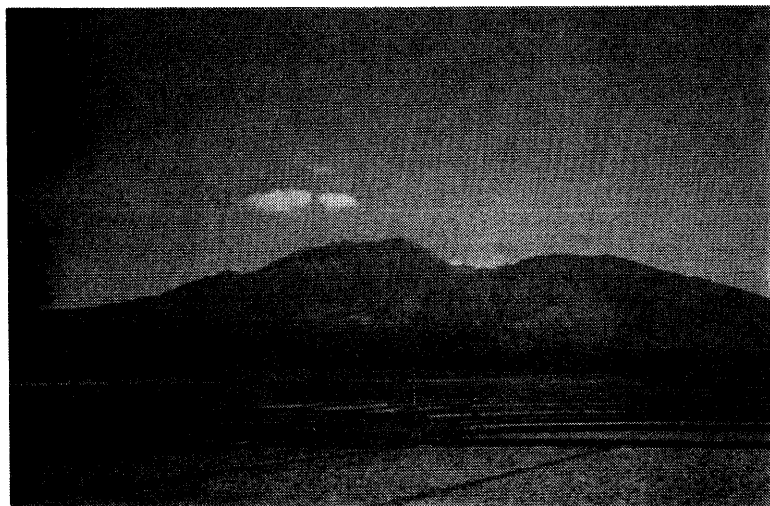


写真1 ウンガラン山の景観，この写真は，クレブ郡内の街道から筆者撮影。
左が本峰，右が前衛のスロロヨ山。



写真2 ウンガラン郡の水田。ウンガラン村からケジ村への路上から筆者撮影。
雲を被っているのはウンガラン山。

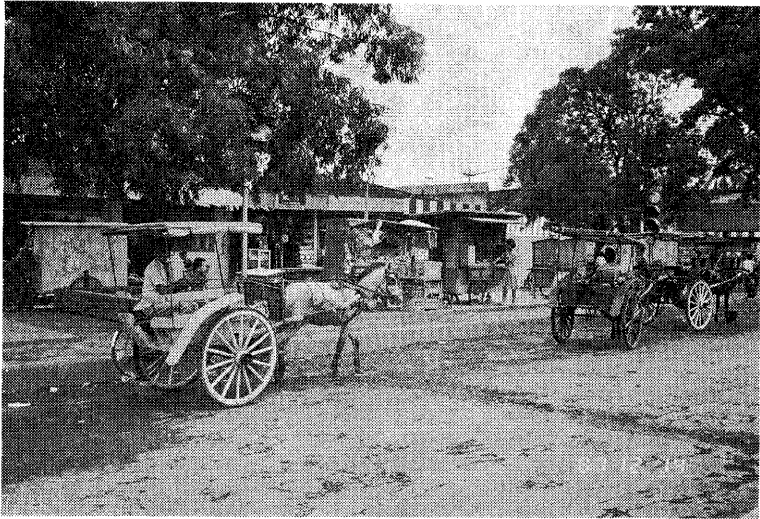


写真3 ウンガランの街角で。(筆者撮影)

し、それまでの上り坂からゆるやかな下り坂に変わる。ここからは、道は丘陵上ではなく、盆地状の広い窪みの中に下りていくようになる。「海拔高度が上がり奥地に入り込むと、もっと美しい自然の景観がそれにとって代わる」とブレーケルが記したのは、このあたりからであろう。右前方には、ウンガラン山の姿がますます大きく目に写るようになる(写真1)。もっとも、このあたりまで来ると、山の最高峰(2,050メートル)はすでに視界から遮られ、前衛峰のスロロヨ山(Gunung Suralaya, 1,613メートル)が見えるだけである。盆地のあちこちには水田が広がっているが(写真2)、その様子は道からはなかなか窺えない。市街化が進み、道の両側には家屋や商店が連続しているからである。

二、三の小川にかかる橋を越えると、そこはもうウンガラン村の中心部である。ここは、村だけではなく、スマラン県(Kabupaten Semarang)およびウンガラン郡(Kecamatan Ungaran)の行政上の中心地でもある。県および郡の

官庁は、大通りからさほど遠くない場所に点在している。「村」というよりは「町」と呼んだ方がふさわしいたたずまいが続く(写真3)。町の真ん中の広場の角で、北西方向へグヌンパティ (Gunungpati), ボージャ (Boja), ケンダル (Kendal) 方面へ向かう道路が分岐する。この道は、ウンガラン山から北流する何本もの溪谷を横切る起伏の激しい道である。これらの川沿いには水田が広がっており、なかには見事な棚田の景観も見られる。旧ウンガラン郡に含まれるのは、現在のグヌンパティ郡の一部地域である。ここは現在スマラン市に属する関係上、行政的には「都市部」に分類されているが、実際の様子は、なお純農村的である。

上記の分岐点から、これまでたどってきた大通りは、再び真南へ向きを変え、幾本もの小川を横切りながら盆地の中央を走る。途中ゲヌック (Genuk), チャンディルジョ (Candirejo), ランゲンサリ (Langensari) などの村々を通過するが、町並みはいずれも、ほとんどひとつながりになっている。沿道には、小奇麗なレストランやホテルなども点在し、人口100万を越す大都市スマランの郊外にふさわしい光景が続く。日本の製菓会社と合弁で作られた大きなビスケット製造工場も道沿いに立地している。大通りの車の往来も頻繁で、中、遠距離の大型乗合バスも数分おきに通過する。その3分の2ほどはサラティガ、ソロ方面へ、残り3分の1ほどがマゲラン、ジョクジャカルタ方面へ向かう。

現ウンガラン郡の領域を抜けてクレプ郡 (Kecamatan Klepu) へ入ると、道は次第に明瞭な上り坂に変わり、ウジル (Wujil), 北ブルガス (Bergas Lor), ディワック (Diwak) などの村々を抜けていく。このあたり、最初は道の両側に伸びやかに水田が広がり、やがて灌木帯に変わる。途中、ウジルあたりで、南西へウンガラン山南麓の避暑地バンドゥンガン (Bandungan) へ向かう道を分ける。やがて海拔600メートルほどの峠に達すると、道は旧ウンガラン郡の領域を抜け出てパウエン (Bawen) の町へ下る。ここで道は、サラティガ、ソロ方面へまっすぐ南進する道と、西へ折れてマゲラン、ジョクジャカルタ方面

へ向かう道とに分かれる。スマランからここまで、自動車による現代の旅路は、わずか1時間あまりの道のりに過ぎない。

2—2. 行政村，区，小集落

ウンガラン地方に限らず，現代のジャワの行政村落（デサまたはクルラハン）は，ふつう複数の集落を包括して構成されている。行政村落は，最下位に位置する地方自治体であるが，その内部には村落行政の便宜のために，「農村部」ではドゥスン（dusun），「都市部」ではリンクンガン（lingkungan）と称される小地域区分が行われている。ドゥスンおよびリンクンガンという呼称は，デサおよびクルラハンと同じく，1979年に改定された村落行政法によって定められたものであり，かつては一般にドゥク（dukuh）またはブドゥクハン（pedukuhan）という呼称が用いられていた。ドゥクは，元來は「派生村」を意味するジャワ語の dhukuh に由来する言葉である。以下，このドゥスンまたはリンクンガンのことを「区」と表現することにする。なお，村長すなわち行政村落の長は，1979年以降の公式用語では，クバラ・デサ（kepala desa，「農村部」の場合）またはルラー（lurah，「都市部」の場合）と称されているが，慣用語としては，「農村部」「都市部」を問わずルラーと呼ばれることが多い。クバラ・デサは村民の選挙によって選ばれるが，ルラーは官選で政府から給与を受ける国家公務員職である。さらに，「区」には，ふつう村長によって任命される区長（その区の居住者から選任）がおり，区内の行政事務を司る。公式用語では，区長はクバラ・ドゥスンまたはクバラ・リンクンガンと称されるが，慣用語は地方により一定しない。

上記の区は，最小の居住集落（特定の用語はないが，漠然とカンボン kampong と呼ばれることが多い）と一致していることもあれば，さらに複数の集落から構成されている場合もある。後者の場合，各集落はさらにその固有名をもっていることが多い。以下，この最小の集落のことを「小集落」と表現することと

する。

行政村落の地理的境界と同じく、村内の区の境も明確に定められており、その境界線は居住地ばかりでなく耕地をも分断しているのがふつうである。これは、区長がしばしば区内の土地についての地稅徵収事務を委任されていることから考えても、自然の理と言える。しかし、歴史的に見ていつごろからこのような慣例が定着したのかは、はっきり分らない。小集落の場合には、このように画然たる耕地境は存在しない。

前項で述べたように、現代の行政村落の地理的規模は19世紀初めの古村落よりもはるかに大きい。それならば、現代の区や小集落についてはどうであろうか。これが、この先取り上げてみたい問題のひとつである。いずれにせよ、現代のジャワの村落の問題を研究するためには、概念としても実体としても、ここで言う行政村、区、小集落の3つのレベルの相違を明確に意識しておくことが必要である。

ところで、行政村の名称は、中央統計局の発行している資料などから容易に把握することができるが、区の名称は一般の刊行物では知りえないし、政府機関でも明確につかんでいない場合が多い。現地へ出向いてみて初めて明らかになることが珍しくない。小集落の場合は、政府機関の資料でも全くその存在を確認しえないのが普通である。しかし幸いなことに、ウンガラン、クレプの2つの郡については、ウンガランの郡役場を訪れた際に、スマラン県政府が1987年11月にたまたま作成したばかりの、県内14郡、248村の総計1,436に昇る全ての区の名前を網羅したタイプ刷りの資料を借覽し、複写する機会を得ることができたために、一挙に全ての区名を明らかにすることができた。旧ウンガラン郡該当地域のうち、現スマラン市に属する残り2郡の場合、スマラン市政府はそのような資料を作成していなかったが、グヌンパティ郡役場では統計担当の役人から域内の全ての区名を聞き取ることができた。これに反して、都市化の進んだ南スマラン郡では、固有の区名はすでに行政上は用いられておらず、

そのようなリストは郡役場にはないという返答があり、ついに求めるデータを得ることができなかった。ただし、同郡内の旧ウンガラン郡内に含まれると思われる行政村落は、わずか4か村に過ぎないので、このデータの欠落が筆者の調査にもたらした損失はさほど大きなものにはならなかった。

付録Cは、このようにして収集したウンガラン、クレブ、グスンパティ3郡38村の全ての区の名前を一覧表に整理したものである。3郡38か村内の区数の合計は184であり、この数字は旧ウンガラン郡内の古村落数197にきわめて近い。かりに南スマラン郡4村の内の区または集落数をこれに加えることができれば、両者の数はほとんど一致するのではないかとさえ考えられる。現在の区が古村落と同一の集落に相当するかどうかは、数の一致だけからでは結論できないが、少なくとも、両者の地理的規模はほぼ同一、または近似している、と推論される。そこで次節では、まず両者の地名の比較対照を行って、両者の関連の如何を検討することしよう。

- 1 このような行政村落の呼称と2類型区分は、1979年の新村落行政法（Undang-Undang Pemerintahan Desa, 1979年法律第5号）によって導入されたものである。

Ⅲ. 村落名の比較対照と村の地理的規模の変化

付録AとCのデータから、相互に対応すると考えられる古村落と現在の区の名前を拾い出し、対照表を作成すると、表3が得られる。この表から、現在の区と名前が確実に対応すると考えられる古村落を数えると103か村（52.2%）となる。これに、対応する可能性のあるもの（現在の区名に？をつけて表示）を加えると、その数は120か村（60.9%）に増加する。さらに、現在の南スマラン郡の2つの行政村落に名前が対応する Banyoemanik, Pedag Pajonan Wetan の2村と、同郡の Pedalangan 村内にある集落（スマラン市の市域図から存在を確認）と名前的一致する Padang 村を加えれば、123か村（62.4%）

表3 古村落名と現在の区の対応 (現在の区名のアルファベット順に配列)

古村落 (19世紀初)	現在の区名	古村落 (19世紀初)	現在の区名
Babadang	Babadan	Kenankan	Kenangkan
Bandaran	Bandaran	Kalie Belang	Kepoh Kalibelang
PegaJa	Begajah	Kepok	Kepok
Bender Desog G.	Bender Desa	KraDinan	Kradenan Barat
Bender Doeko G.	Bender Dukuh	同上	Kradenan Timur
Bang Lee	Bengkle	Bedje	Krajan (Beji)
Blanten	Blanten	Bergas Kidoel	Krajan (Bergas K.)
Branjan Jaran	Branjang	Bergas Lor	Krajan (Bergas L.)
Branjan Jaran Lor	同上	Genook	Krajan (Genuk)
Tjandie	Candirejo	Jati Jajar	Krajan (Jatijajar)
Tjemo Galor	Cemanggh Lor?	Moending	Krajan (Munding)
Tjemo Kidol	Cemanggh Kidul?	Pala Langang	Krajan (Plalangan)
Je Mangal	Cemanggal	Soesoekan	Krajan (Susukan)
TjerBonang	Cerbonan	Krajan	Krajan (Ungaran)
Tjempo Goenoong	Compok?	Woejel	Krajan (Wujil)
Tjongol	Congol	Krettek	Kretek
Delik	Delik	Pakoentjeng	Kuncen
Dersoeni Goenoon	Dersuni	Lemabang	Lemabang
Dersoeni Joerang	同上	Lempoejang	Lempuyang
Diwag	Diwak	Lerep Demmang	Lerep
Dliwang	Dliwang	Lorg	Lorong
KeDompon	Dompo	Kemalon	Malon
Gebook Goenoong	Gebug	Manik Mojo	Manikmoyo
Gebook Joerang	同上	Miejen Doeko	Mijen
Geboegan	Gebugan	Maroeten Koeloon	Mrunten Kulon
Gedang Ganak	Gedanganak	Maroeten Wetan	Mrunten Wetan
Gembongang	Gembongan	Moending Kidoel	Mundingan?
Getas	Getas	Moending Lor	同上?
Gientoengan	Gintungan	Moental Doeko	Muntal
Derkilo	Indrokilo	Abblak	Ngablak Bugangan
Jelok	Jelok	Goenoong Patie	Ngabean (Gunungpati)
Jetis	Jetis	Aglik	Ngaglik
Kalie Alang	Kalialang	Leemboon Kidoel	Ngimbun?
Kali Kassir	Kalipasir?	Leemboon Lor	同上?
Kali Sarie	Kalisari	Larang	Nglarang
Kalisai Goenong	Kalisidi?	Rembel	Ngrembal?
Karang Goenoeng	Karang Geneng	Pakintellan	Pakintelan Barat
Karang Anjer	Karanganyar	同上	Pakintelan Timur
Kawis Bolo	Karangbolo	Geger Salam	Pager Salam?
Karang Jatie	Karangjati	PoAren	Paren
Kebon Kliwong	Kebon Kliwon	Penkol	Pengkol
Kebon Mangis J.	Kebon Manis	Petoong	Petung
Kebonan	Kebonan	Pilahan Goenong	Pilahan
Kebon Ombo	Kebonombo	Kapondoeng Poetie	Pundung Putih
Keyi Joeran Demang	Keji	Poetattan	Putatan
Keyi Joeran Pladak	同上	Randoe Goenting	Randu Gunting
Keyi Mijen Joeran	同上	Sabrangang	Sabranan

表3 (続) 古村落名と現在の区の対応

古村落 (19世紀初)	現在の区名	古村落 (19世紀初)	現在の区名
Sedaijoe	Sedayu	RowoまたはRowo D.	Sirowo?
Seginie	Segeni	Soko	Soka
Pakalongan Koelon	Sekalongan?	Sroemboong	Srumbung
Pakalongan Wetan	同上?	Sroewen	Sruwen
Semboenang	Sembungan	Soemoor Goenoeng	Sumurgunung
Sendangan	Sendangputriまたは Sendangrejo	Soemoer Joeran	Sumurjurang
Sendeng	Senden	Karang Taloon	Talun Kacang?
Sewakoel	Sewakul	Tegal Melik	Tegalmelik
Sekoeneer	Sikunir (Bergas L.) またはSikunir (Gunungpati)	Terwidie	Terwidi
Glowa	Silowah?	Troeko Kidol	Truko
Siroto	Siroto (Candirejo)	Troeko Lor	同上
Sroto	Siroto (Nyatnyono)	Selo Gemoeloong	Watusari? (1)
Srotto	Siroto (Pagersari)	Winong lor	Winongsari
	Siroto (Susukan)	Wonno Sarie Koelon	Wonosari
	Siroto (Gunungpati)	Wonno Sarie Wetan	同上

(1) Selo Gemoeloong は「ごろごろした石」、Watusari は「美しい石」の意。前者の名をもっと聞こえの良い後者に変更した可能性は大。

という数が得られる。逆に、古村落に名前が確実に対応する現在の区は100 (54.3%)、対応する可能性のあるものを加えると、114 (62.0%) となる。つまり、いずれの側から見ても、5～6割は名前が対応するという結論が得られる。

この対応率の値は、十分に高いと評価すべきであろうか。それとも、あまり高くはないと考えるべきであろうか。別の言い方をすると、この数値からは、古村落と現在の区との同一性、連続性を読み取るべきであろうか、それとも、異質性、非連続性を読み取るべきであろうか。筆者は、対応率は十分に高く、古村落と現在の区との間には、かなり明確な連続性が存在する、という解釈を採る。その理由は、次のとおりである。

まず第1に、19世紀初めから現在までの180年間には、同一の村落または集落に対する呼称が、何らかの理由で変更された事例は決して少なくないと考えられる。大きな時代の変わり目や、行政上の村落の改廃や合併・分割、村の歴

史に残る大きな出来事の際に、地名が意図的に変更されるのは、世界のどこでも決して珍しいことではない。村落ではなく都市や県名の場合になるが、古くは Japan と呼ばれた東ジャワの町が19世紀後半に Mojokerto と名前を変更した例、Jipang と呼ばれたやはり東ジャワの町が Bojonegoro と改名した例、かつての Batavia や Buitenzorg がオランダ支配の終焉とともに Jakarta, Bogor と名を変えた例、つい10数年前に、南スラウェシの州都の名が Makassar から Ujung Pandang に改められた例、かつては Bagelen, Kedu と呼ばれた中部ジャワの県が今日では Purworejo, Megelang と呼称を変えている例など、類似の事例はインドネシアには数多い。第2に、実際に現地へ行って確認すると、ひとつの古集落や区が複数の小集落から構成されている例はかなりあり、全体を代表する村落名または区名が、ある小集落の名から別の小集落の名に取り替えられたと思われる場合が相当にある。第3に、全体として古集落と区との連続性という命題の妥当性を損なうほどの数にはならないが、古村落が何らかの理由で消滅したり、全く新しい集落が形成されたために、古い村落名が廃れたり新しい区名が生まれたケースも考えられる。第4に、すでに述べた復元作業にもかかわらず、旧ウンガラン郡の地理的境界と、ここで想定したその範囲との間になお「ずれ」があるために、古村落と現在の区との間に不対応が生じたケースも、かなりあるかも知れない。

これらの要因を割り引いて考えると、180年間というきわめて長期の時間の経過をはさんで5～6割の地名が対応するという事実は、古村落と現在の区間の同一性、連続性を強く示唆するものと推論することができる。以下、この点をもう少し別の考察を加えることによって補強しよう。表4は、古村落との名前の対応が見出せない67の区を、所属行政村別に配列したリストである。この表を見ると、これらの区は比較的限られた行政村内に分布していることが分かる。そこで、先の図1によってこれらの行政村の位置を確かめると、その多くが、本稿で想定した旧ウンガラン郡の郡域の周縁部に位置していることが

表4 古村落と名前の対応しない区名一覧（所属行政村別にアルファベット順に配列）

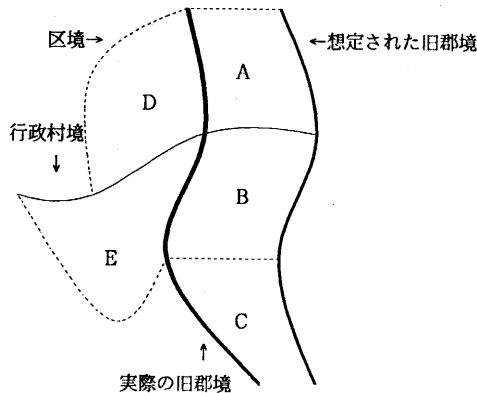
区名	行政村	種別	区名	行政村	種別
Lewono	Beji	境	Krajan	Mangunsari	
Manggihan	Beji	境	Mranggen	Mangunsari	
Parakan	Beji	境	Salakan	Mangunsari	
Prampelan	Beji	境	Gemawang	Munding	境
Sekebrok	Beji	境	Kalisegoro	Ngijo	境
Kemloko	Bergas Kidul	境	Krajan	Ngijo	境
Sidorejo	Bergas Lor	境	Puritan	Ngijo	境
Cepoko	Cepoko	境	Rejosari	Ngijo	境
Jedung	Cepoko	境	Gelap	Nyatnyono	
Kandri	Cepoko	境	Krajan	Nyatnyono	※
Siwarak	Cepoko	境	Sipol	Nyatnyono	
Sukorame	Cepoko	境	Krajan	Pagersari	境
Watubulan	Gedanganak		Ampelgading	Patemon	※境
Genuk Barat	Genuk		Krajan	Patemon	※境
Rejosari	Genuk		Kutan	Randu Gunting	境
Gogik	Gogik	※境	Banaran	Sekaran	境
Derbalan	Gunungpati	境	Bantardowo	Sekaran	境
Jagalan	Gunungpati	境	Delik Rejosari	Sekaran	境
Jetis Trawas	Gunungpati	境	Krajan	Sekaran	境
Karanganyar Kidul	Gunungpati	境	Persen/Ngasinan	Sekaran	境
Karanganyar Lor	Gunungpati	境	Trangkil	Sekaran	境
Perengsari	Gunungpati	境	Muneng	Sidomulyo	※境
Si Krangeng	Gunungpati	境	Bangsewu	Sukorejo	境
Saren	Jatijajar	境	Dung Wadas	Sukorejo	境
Kalianyer	Kalirejo	境	Kalialig	Sukorejo	境
Pekesan	Kalirejo	境	Perum. IKIP	Sukorejo	境
Setoyo	Keji		Perum. UNDIP	Sukorejo	境
Suruhan	Keji		Jongkong	Sumurgunung	
Tegalrejo	Lerep		Karangsari	Sumurgunung	
Kalikopeng	Leyangan	境	Kaum/Dampyak	Sumurjurang	
Krajan	Leyangan	境	Kaligawe	Susukan	境
Lengkong	Leyangan	境	Mojo	Susukan	境
Kalirejo	Mangunsari		Setinggen	Wujil	
Kepil	Mangunsari				

分かる。具体的には、Beji, Bergas Kidul, Cepoko, Gogik, Gunungpati, Jatijajar, Kalirejo, Leyangan, Munding, Ngijo, Pagersari, Patemon, Randu Gunting, Sekaran, Sukorejo, Susukan の村々である。すでに説明したように、図1の旧ウンガラン郡域想定図は、現在の行政村域の境界の外縁をつなぐことによって作成されている。各村内の区の境界線を地図上で確定することは、

全ての行政村を訪ねて実地に調査しなければ不可能なので、行政村を単位とした作図を行わざるを得なかったからである。このために、19世紀初めに実際に引かれていた郡域の境よりも、この想定図の境は外側に位置している場合がかなりある、と考えねばならない。その様子を模式的に描いたのが図2であるが、この図で言えば、現在のA区、B区、C区は、実際には旧ウンガラン郡域の外側にあるにもかかわらず、本稿で採用した方式では、あたかも郡域内に所在するかのように処理されることになる。表4の「種別」の項で「境」と記した区の多くは、実はこの種の、いわば測定誤差によって、旧ウンガラン郡内の集落として扱われた域外集落である可能性が高い。とすれば、付録Aの古村落に対応名を発見できないのは、当然の結果である⁽¹⁾。これら境界地帯の区を除外すると、改めて古村落との名前の不对応を問題にしなければならない区は、Sidorejo, Watubulan, Genuk Barat, Rejosari, Setoyo, Suruhan, Tegalorejo, Kalirejo, Kepil, Krajan(Mangunsari), Mranggen, Salakan, Gelap, Krajan(Nyatnyono), Sipol, Muneng, Jongkong, Karang Sari, Kaum/Dampyak, Setinggen の計20に限られてくる。

これら20のうち、まず、Krajan (Nyatnyono) および Muneng の2区は、

図3 旧郡域想定図と実際の境界のずれ (模式図)



1846年の村落名との対照および後で述べる実地調査の結果から、歴史の古い集落であることが判明している（このように歴史の古い集落であることが判明している区については、表4では※印をつけて識別してある）。付録Aのリストではおそらく、記載漏れになったか、近接する別名の村落の一部に含めて扱われたかのいずれかであると推定される。他方、Sidorejo, Rejosari, Tegalrejo, Kalirejo, Karang Sari の5区は、現代風の名前から判断して、途中で変名されたか全く新しく創設された集落である可能性が高い⁽²⁾。次に、Genuk Barat（Baratは「西」を意味するインドネシア語）は、明らかに、古村落のリストにも存在するGenuk集落の分村であり、新たに派生したか、19世紀初めの時点では母村であるGenukの中に含まれていたかのいずれかである。残り12区については、不对応の原因を明らかにする証拠がないが、その大半は、19世紀初めの時代には他の村落の中に含まれていた小集落がその後新区として独立したか、または全く新たに派生した分村であるか、あるいは古村落が何らかの事情で名前を変えたか、のいずれかであると推測される⁽³⁾。以上のように整理すると、現代の区の大半が古村落に対応する存在であるという仮説は、強い説得力をもって支持される、と結論してよいであろう。ただ、この場合にも、若干の問題は残る。そのひとつは、古村落の側に、現代の区と名前の対応しないものがかかり多く残る点である。もうひとつは、現在の区の一覧表から、上記の境界村落などを除外してしまうと、古村落の数と区の数に対応関係が崩れてしまう点である。これらの点については、現在の区のうちのあるものは2つまたはそれ以上の古村落を包括しており、少なからぬ古村落名が区名としては消滅したこと、従ってまた、現在の区数の合計は、実際には古村落数の合計よりは少なめになっている、と推定することで説明がつく。これについては、次節で実地調査の結果から二、三の事例を示すことにしたい。

そこで、中間総括として、これまでの考察の結果をまとめておくと、次のとおりである。

① かつての古村落は、19世紀前半から進められた合併政策の結果、より広域の行政村落に統合された。これは、19世紀初めの村落リストと1846年の村落リストの照合から明確に証明される。さらに、現在の行政村は、1846年のそれと比べてみても、いっそう地理的範囲の広いものになっている。19世紀半ば以降今日まで進められた行政上の村落合併の痕跡は、現代の区名のうちに、中心村すなわち村長居住地または村役場所在地を意味する Krajan という名称がきわめて多く用いられていることにも認められる⁽⁴⁾。従って、たとえ同じくデサと呼ばれていても、地理的な意味で、また社会組織として、古村落と19世紀半ば以降現在までの行政村落を同一視することは、到底できない。行政村落は、明らかに、19世紀以降の植民地政策あるいは地方行政政策の産物である。

② にもかかわらず、古村落の多くは、居住単位あるいはある種の生活共同体として、決して消滅しておらず、現在に至るまで存続している。現在の区の多くは、古村落の継承者として捉えることができる。かりに区が古村落よりも規模の大きいものに再編成されている場合でも、区のさらに内部にある小集落のレベルで古村落は維持されている場合が多い、と想定される。

そこで、次節では、実地調査で収集した若干の事例を挙げて、区と小集落の実際のあり方を示すことにする。

- 1 ただし、Gogik, Ampelgading, Krajan (Patemon), Sekaran の4区は、付録Bの1846年の村落名リストに名前が登場する。19世紀初めには郡内に含まれなかったのが1846年には含まれるようになったか、古村落のリストで記載漏れになったか、別の古村落の中に含まれていけば陰に隠れていたか、のいずれかであろう。
- 2 境界村落として除外した区の中にも、新設集落として識別できるものがある。例えば Perum. IKIP (Perumahan IKIP の略、教育大学教職員住宅の意)、Perum. UNDIP (ディボヌゴロ大学教職員住宅の意)などは、明らかにごく近年の新設区である。
- 3 これらのうち、最も説明が難しそうに見えるのは、Mangunsari 村の4つの区の場合である。Mangunsari 村は、旧郡境の内側深いところに所在しており、周囲は Pakintelan, Sumurjurang など古村落を多数擁する行政村落に囲まれている。5万

分の1地形図には、ひとつながりのかなり大きな集落としての Mangunsari の記載があるが、Kalirejo, Kepil, Mranggen などの集落名は見出されない。他方、Mangunsari という村名は、「美しく (sari) 建設する (mangun)」という語義から考えて、比較的最近に導入されたものである。これらの点から推測すると、Mangunsari はかつて別の名前で呼ばれた村落であり、Kalirejo, Kepil, Mranggen はその中の小集落であったか、後年に派生した分村である、と考えられる。

- 4 ただし、元来の語義から言えば話は逆であって、後に分村を派生した母村を Krajan と呼ぶのが本来の用法である。この言葉の上の原義にとらわれて今日存在する Krajan 名の区の村落史を想像すると、現実のできごとの順序をとり違えた解釈に陥ることになる。

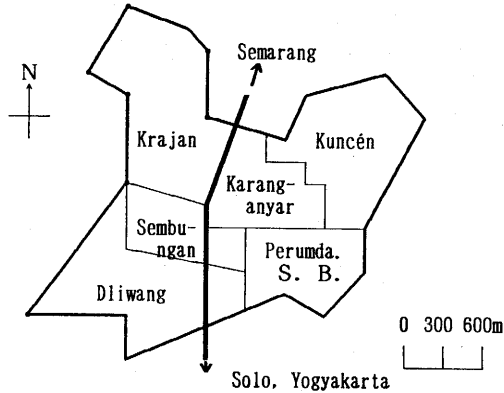
Ⅳ. 8か村調査の概要

現在の行政村落が、その域内でどのように複数の区に区分されているか、また区の下には小集落が存在するかどうかという問題を実地に検分するために、また、村の歴史を探るための諸々の情報やデータの探索も目的として、現ウンガラン郡内の8つの村を選んで村役場を訪問し、若干の聞き取り調査を行った。以下は、その成果の概要である。

4-1. ウンガラン村 (Kelurahan Ungaran)

郡の中心に位置するウンガラン村は、1981年に都市部の村落と認定され、デサからクルラハンに移行した。1987年の人口は1,803世帯8,212人（うち男3,866人、女4,346人）と記録されている。村内は、付録Cに示したように、Kuncen, Karanganyar, Dliwang, Sembungan, Krajan の5つの区 (Lingkungan) に分かれていたが、最近村の南東隅に地方政府開発の住宅地が造成され、この団地一帯が独立して Perumda. Sebantengan Baru という新しい区が設けられた (perumda. は perumahan daerah, すなわち「地方住宅」の略)。村と各区の境界を、ごく大まかに図示すれば、図4のようになる⁽¹⁾。

図4 ウンガラン村概略図



Karanganyar, Sembungan, Krajan の3区内には、さらにいくつかの小集落があり、行政上ルクン・ワルガ (rukun warga, 略称RW) つまり小区に区分されている。まず、Karanganyar の場合は、Karanganyar 1から3までの3つのRWと Legosari という名のもうひとつのRWが存在する。Sembungan の場合は、Sembungan, Setenan, Tugusari の3つのRWに区分されている。また、Krajan 区は、Kauman, Terbayan, Kepolisian, Kluwihan, Jagalan, Ngablak, Jambun, Sariharjo の8つのRWに分かれている。しかし、実際の印象では、今日のウンガラン村の集落は都市的な市街地と住宅地がひとつながりになっており、見た目にはこれらの小集落の区別は実感できない。また、5つの区の全てが古村落と名前が対応するにもかかわらず、これらのRWに対応する名の古村落は検出されない。

次に村内の土地利用についてみると、都市化の進行にもかかわらず、村の総面積の約4分の3は農業用地によって占められている。その大半は、個人の私有地 (tanah yasan) であり、第Ⅶ節で問題にする共同占有地は今日では存在しない。ただし、3/4ヘクタールの耕地が「村財政田」(bondho desa) として村の財産になっており、村長以外の村役人に支給される職田 (bengkok) も若

干残されている。村長の職田は1981年に都市部村落に移行した際に政府によって廃止され、現在では村長の報酬は、内務省の支給する俸給に切り換えられている。

ウンガラン村の歴史については、はっきりした伝承は残されていない。村の開祖 (cikal bakal) は、Ki Ageng Ungaran という人物であると伝えられている。また、かつて植民地時代のウンガラン村には、阿片の吸烟所(pecandun) が設けられていた、ということが多くの村人によって記憶されている。

4-2. バンダルジョ村 (Kelurahan Bandarjo)

バンダルジョ村の1987年の人口は、1,206世帯、6,054人(男3,050人、女3,004人)である。県政府資料による付録Cの一覧表では、この村にはBandaran, Cerbonan, Sewakul の3つの区が存在する。これら3区は、いずれも古村落に対応する。しかし、現在では実際は、もうひとつ Kebunpolo という区が設置されている。これは、やはり最近造成された官舎用地である。これら4区の地理的区分はおおむね図5のようである。

図5 バンダルジョ村概略図

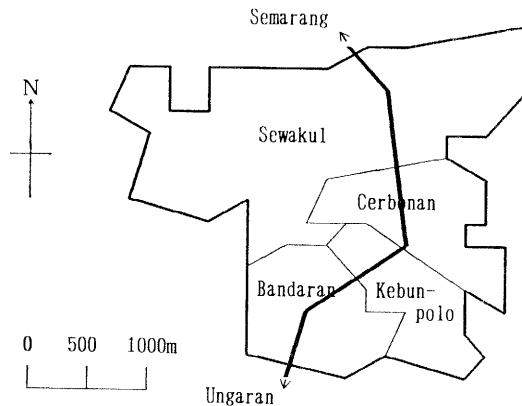


表5 バンダルジョ村の小集落一覧表

区	小 集 落 (RW)
Bandaran	Gemuksari, Sendang Waru, Tegalsari, Ngablak
Cerbonan	Gemulung, Sendang Manggis
Sewakul	Tarbudaya, Tegalrejo, Cemungsari
Kebunpolo	Gedung Kuning

これら4区の中には、やはりいくつかの小集落があり、表5のようにそれぞれRWに編成されている。これらのRWの中には、やはり古村落に対応する名をもつものは見出せない。

村の中には46ヘクタールの水田がある。その内訳は、半技術的灌漑田(irigasi setengah teknis)⁽²⁾が18ヘクタール、簡易灌漑田(irigasi sederhana)が21ヘクタール、天水田が7ヘクタールである。うち、0.865ヘクタールが村役人職田として村の所有になっている。この他に村内には、屋敷地(pekarangan)が122ヘクタール、畑および樹園地(tegal & kebun)が49ヘクタール存在する。かつては水田の中には、租税負担と引換えに村から割り当てられるサンギム(sanggem)と呼ばれる共同占有地が存在したが、1960年に制定された農地基本法(第Ⅶ節参照)の施行以後は、全て個人の私有地(tanah yasan)に転換して今日に至っている。

村長が個人的に伝え聞いているかぎりでの村の歴史は、次のとおりである。行政村としてのバンダルジョ村はかつては存在しておらず、現在の村域の南部はウンガラン村に、東部はススカン村に所属していた。戦前は、村内の土地の半分以上が中国人またはオランダ人の所有地(eigendom)であり、残りが地元民の保有地(yasan)であった。バンダルジョ村は、かつて大通りを往来する牛車や馬車の停留所として栄えた。地名の起こり(bandaran)もこれに由来する。また、1920年代の後半には、やはり阿片の吸烟所が設けられていた。村

内の Bandaran 区は、ウンガラン村の開祖で、オランダ人に敵対して殺害された Ki Ageng Ungaran の埋葬地であった、と伝えられている。また、Sewakul 区には、1820年代にオランダと戦ったディボスゴロ王子の従者の墓と伝えられる場所がある。1920年代の初めにこの村にはキリスト教（プロテスタント）の布教が行われ、現在でも多くのキリスト教徒がいる。

4-3. ススカン村 (Kelurahan Susukan)

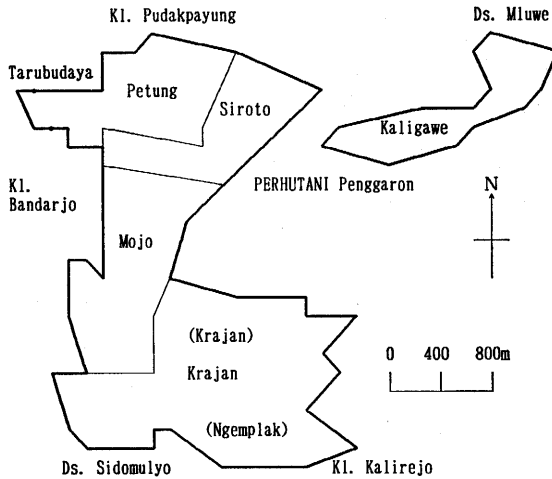
「ススカン」とインドネシア語流の発音を模して表記したが、ジャワ語流では、kが声門閉鎖音になるので、「ススファン」のような発音になる。現ウンガラン郡の北東隅に位置する村であるが、実際に足を運んでみると、都市近郊の住宅地帯への変貌の途上にあるような印象を受ける。この村の区別人口は表6、概略図は図6のようである。5つの区のうち Mojo, Kali Gawe 以外の3区は、古村落に名前が対応する。位置から考えて、Mojo は Krajan から派生した分村、Kali Gawe は境界地帯に位置するため、旧ウンガラン郡外にあった集落かとも考えられる。なお、Kali Gawe 区は、国営林業公社 PERHUTANI の管理する Penggaron 国有林によって、他の区から隔てられており、村役場の地図では、この国有林は村外地として扱われている。区内に小集落を抱えるのは Krajan 区のみで、Krajan および Ngemplak の2つのRWがある。付録Aの古村落リスト中の Emplag は、この Ngemplak と名前が対応する。

この村の開祖は、Ki Mandung と称される人物と考えられており、開村の

表6 ススカン村の区別人口数 (1987年)

区名	Petung	Siroto	Mojo	Krajan	Kali Gawe	計
男	372	241	422	465	322	1,822
女	361	225	396	523	360	1,865
計	733	466	818	988	682	3,687 世帯数計 669

図6 ススカン村概略図



いきさつについては興味ある伝承が残されている。これについては、次節で詳しくとりあげる。現村長の説明によれば、この村はかつて行政的にはバンドルジヨ村に属したが、のちに分かれて独自の行政村となった。もっとも、19世紀初めの古村落のリストには Bandaran, Soesoekan の双方が記載されており、反面、1846年のプレーケルのリストでは Soesoekan は存在するのに Bandaran の方が消滅している。また1961年の人口センサスの時点では、Bandarjo, Susukan の両村ともすでに存在することが確認される。従って、この説明が正しいとしても、ススカン村がバンドルジヨ村に属していたのは、限られた一時期のことであったと推測される。

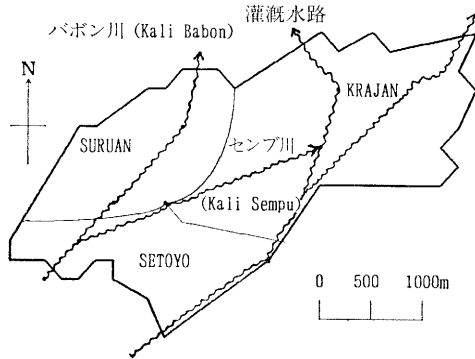
4—4. ケジ村 (Desa Keji)

この村は、ウンガランから北西にグヌンパティ方面への支道を数キロたどり、さらに南西へウンガラン山麓を遡った中腹の地帯に位置している。村内には

表7 ケジ村の区別世帯数、人口

	世帯数	男	女	人口計
Krajan	168	—	—	724
Suruan	87	—	—	354
Setoyo	90	—	—	383
計	345	726	735	1,461

図7 ケジ村概略図



Krajan, Suruan, Setoyo の3区(図7)があり、それぞれの人口と世帯数は、表7のとおりである。このうち、古村落に名前が対応すると見なせるのは、中心集落としての Krajan のみである。ただし、Krajan 区内には、Keji Logosari, Keji Duko, Keji Juran の3小集落がある。これらが、古村落リストの3村、すなわち Keyi Joeran Demang, Keyi Joeran Pladak, Keyi Mijen Joeran に対応する可能性は高い。とすれば、Krajan 区よりも山寄りに位置する Suruan, Setoyo の2区は、後年の派生村と見なしてよいかも知れない。

村役人たちの説明では、かつては、この村でも耕地の保有形態に、sanggem とブラン(beran)の2種があった。sanggem とは、賦役や納税の義務を伴う上質の水田、beran とは、自力で開墾した耕地を指す言葉であった。現在はこ

の区別は消滅して久しい。

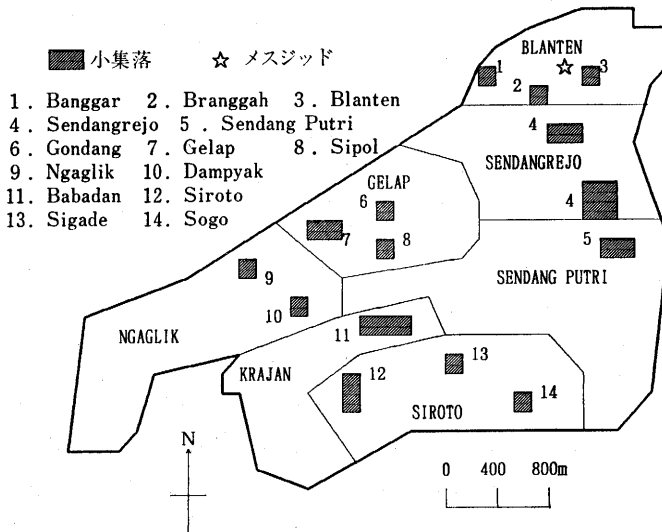
ケジ村には、村名の由来に関する、いささか奇妙な伝承が残されている。これについては、次の節で触れる。

4-5. ニャトニョノ村 (Desa Nyatnyono)

この村は、ウンガラン村の南西方数キロ、ウンガラン山の東側の山腹の斜面に位置する山村である。村域の最高点は海拔 1,200 メートルを越え、最も低い部分でも 600メートル前後に達する。海拔 800~1,000メートル付近で湧き出す泉や溪谷が、この村に古くから集落を成立させた、と推定される。しかし、村内に水田は少なく、トウモロコシなどもっばら畑作が行われている。

すでに述べたスマラン県作成の資料によれば、この村には、Ngaglik, Gelap, Sipol, Krajan, Siroto, Sendangputri, Sendangrejo, Blanten の 8つの区が存

図8 ニャトニョノ村概略図



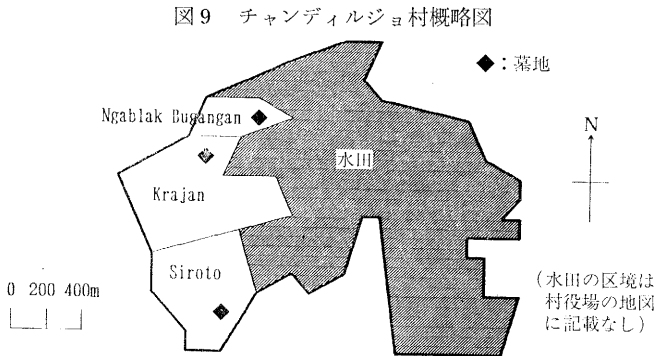
ジャワ村落史の検証

在する。1987年の村の総人口は、1,080世帯、男2,165人、女2,188人、計4,353人と記録されていた。区ごとの人口データは、村役場でも入手できなかった。村役場で閲覧した地図では、Gelap 区と Sipol 区とは、あたかもひとつの区のように描かれており、両者の境界線を明らかにすることはできなかった。概略図は、図8のようになる。古村落と名前が対応する区は、Ngaglik, Sendangputri, Sendangrejo, Blanten の4つである。他方、各区内には、それぞれいくつかの小集落があり、その合計数は14に及ぶ。その名は、図8に記入したとおりである。上記4区と同名の4集落の他に、Branggah, Babadan, Siroto の3集落が、古村落(Branga, Babadang, Siroto/Sroto/Srotto)と名前が対応する。もっとも、Babadan, Siroto の名の区は別の村にも存在するので、この村のそれらが古村落に一致する集落かどうかは分からない。Branggah については、他に例がないので、古村落との一致はほぼ確実であろう。

この村には、きわめて興味深い開村伝承が残されている。これについては、次節で詳しく紹介する。

4-6. チャンディルジョ村 (Kelurahan Candirejo)

この村は、前記ニャトニョノ村の東隣、ウンガランからバウエンに向かう



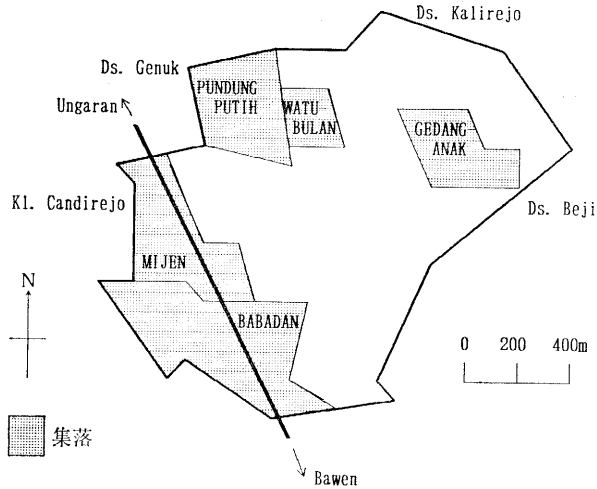
大通りの西側に位置する。行政上は都市部村落になっているが、実際の様子は、まだ農村の性格が色濃い。村は3区から成り(図9)、人口は、Ngablak Bugangan 区 542人、Krajan 区 815人、Siroto 区(または、Siroto Babadan 区とも称する) 722人、計 2,079人(うち男 1,080人、女 999人)と記録されている(1987年)。区の下には、各区に2つずつ、計6つのRWが置かれている。これらのRWは現在、番号で呼ばれており、固有名は用いられていない。しかし、村役人の説明では、かつて Ngablak Bugangan 区は Ngablak と Bugangan の2つの村に、Siroto 区は Siroto と Babadan の2つの村に分かれており、それぞれの村の長は、ブクル(bekel)と呼ばれていた。これら4つの小集落は、いずれも古村落に名称が対応する。小集落が古村落を継承している典型的事例と言えよう(ただし、Babadan, Siroto の2つは、前記ニャトニョノ村をはじめ他村にも同名の区や小集落が存在する)。

この村の名前は、現 Krajan 区内に、かつて数多くのヒンドゥー寺院(candi)遺跡が存在したことから生まれた。現在でも2か所がその跡として村人に記憶されているが、遺跡自体は土砂の崩壊のために消滅している。また、Siroto 区の開祖は、隣村ニャトニョノ村の開祖と同じ Hasan Munadi(後述)と考えられている。

4-7. グダンアナック村 (Kelurahan Gedanganak)

この村は、前記チャンドイルジョ村のさらに東側、盆地中央の平地部に位置しており、村域の西部を南北にウンガランからバウエンへ向かう大通りが貫通している。5つの区から成り、総人口は男 2,185人、女 2,232人、計 4,417人である。5つの区(図10)のうち、Watubulan を除く他の4区は、いずれも古村落に名前が対応している。位置から考えて、Watubulan は、Pundung Putih からの派生村であろう。この村の場合、RWは全て区(lingkungan)と一致しており、その下には固有名をもつ小集落は存在しない。ただし、RWの

図10 グダンアナック村概略図



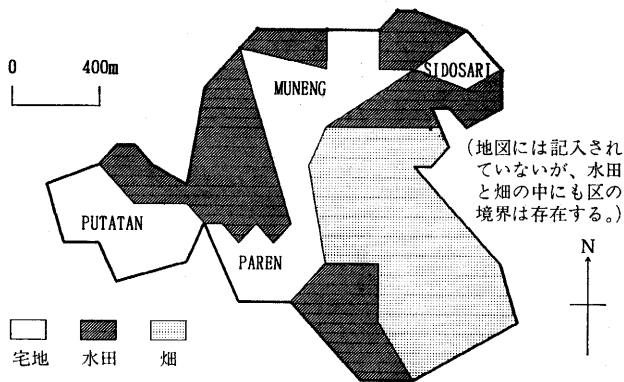
下に全部で30のRT (rukun tetangga, 隣組) が組織されている。いずれの区も都市化が進行しており、大都市近郊の住宅地帯という印象が強くなっている。

村の起こりについては、奇妙な伝説が残されている。これについては、次節で紹介する。

4—8. シドムルヨ村 (Kelurahan Sidomulyo)

この村は、ウガラン村の東側に位置する。村内の居住環境は、すでに準都市的である。村は、Paren, Muneng, Putatan, Sidosari の4区から成る。各区の人口は、Paren 区 817人, Putatan 区 605人, Sidosari 区 251人, 村全体では 536世帯, 2,443人 (男 1,219人, 女 1,224人) となる。Paren, Putatan の2区は、古村落に名前が対応しており、Muneng 区も同名の村が1846年のリストに発見される。これに対して、Sidosari区は1976年以降に、従来水田であった土地を転用して作られた新開の住宅地であり、付録Cの県政府資料のリスト

図11 シドムルヨ村概略図



にはまだ記載されていない。Sidomulyo という村名が新しいものであることは、すでに述べた。3つの旧村落を合併したときに作られた地名であることは、明らかである。村役場の資料では、村の総面積は、116.780ヘクタール、内訳は、宅地20ヘクタール、畑 (tegal) 14ヘクタール、水田37.785ヘクタール、その他44.995ヘクタールとなっている。「その他」とあるのは、おそらく、村域南東部を占める国有林などであろう。図11に各区の位置と水田、畑の分布の概略を示す(上記国有林地域は図から除外)。

伝承によれば、PAREN 区には、遠い昔にメスジッドを建てるために集められた石材の遺物が残されている。建設が中止されたために、これらの石材は放置されて残存することになった。この故事のために、この集落は Lérén (中断する、の意) と名付けられ、転じて Parén と呼ばれるようになったという。しかし、第I節でも記したように、Parén は、arén (砂糖ヤシ) または paré (苦瓜) から転じた語である可能性もある。

他方、Muneng 区の名は、かつてこの村の住民の多くがたいへん寡然 (menengan) であったことに、また Putatan 区の名は、昔この地に沢山の putat の樹が生えていたことに由来する、と伝えられている。

以上の調査事例からも、多くの場合区のレベルで、またときによっては区のさらに下位の小集落のレベルで、19世紀初めの古村落の地名が維持されていることが確認される。このことは、行政村落の形成と広域化にもかかわらず、自然発生的な居住の単位としての古村落が、現在に至るまで消滅せずに存続していることを示す。それでは、このような村落は、いつごろ、どのような経緯で形成されたのであろうか。この問題を、記録された史料によって明らかにすることは、ほぼ不可能である。しかし、いくつかの村々に口伝で伝えられてきた開村伝承から、その時期を推定することは可能である。次節では、やはり主に8か村調査の成果に拠りながら、それを試みたい。

- 1 以下、本節で示す各村落図は、実地調査の際に村役場備え付けの地図を手粗くスケッチしたものを、さらに模式化したものにすぎない。参考までに、いちおうの目安として縮尺を入れてあるが、村境、区境の形状、長さとも正確に測定した結果ではない。また、書き入れてある事物も村によって異なっている。例えば、ある村には水田の記載があるのに他の村にはないとしても、そのことは後者に水田が存在しないことを示すわけではない。
- 2 「半技術的灌漑」、「簡易灌漑」など灌漑設備の状態による水田の類別については、第Ⅷ節で説明する。

V. 古村落の歴史的起源

1860年代のジャワの土地制度についてのオランダ植民地政府の調査報告書(『ジャワ・マドゥラの現地人土地権調査最終提要』、以下『最終提要』と略)⁽¹⁾の理事州別調査結果概要の箇所には、当時のスマラン理事州(Residentie Semarang)の多くの調査村では、村の開祖の名前が村人たちに記憶されており、場合によっては開村の時期が推定可能な場合もある、という説明がなされている。それによると、この地域の全調査村(50か村)のうちで最も歴史が古いと考えられるのは、ウンガラン郡のパススカン村(desas Pasoesoekan)であ

る。この村落は、明らかに、付録Aの古村落ススカン (Soesoekan), 1846年の同名の村落, および現在のススカン村クラジャン (Krajan) 区と同一である。上記報告書によると、この村には、16世紀の最初のイスラーム王朝デマック (Demak) 王国の時代に、セフ・パンダンサリ (Sech Pandansari) という名のイスラームの布教者によって村が開かれた、という言い伝えが残されていた⁽²⁾。19世紀のこの報告は、地元民の間で伝えられている開村伝承が村の歴史的起源について何らかのヒントを与えうることを、またウンガラ地域内の村々の中には、植民地期よりもはるか前に開かれたものが存在することを示唆している。

このことを念頭において、前記の8か村調査では、この種の伝承の収集に注意を払った。その結果、すでに述べたものの他に、ススカン、ケジ、ニャトニョノ、グダンアナックの4村でも、村の成立のいわれを述べた伝承を、村役人や古老たちから聞き取ることができた。とくに、ススカン、ニャトニョノの2村のそれは、はなはだ興味深いものであった。以下、その内容を要約、紹介する⁽³⁾。

5-1. ススカン村の開村伝承

『最終提要』に登場する Pesoesoekan 村の後身であるこの村には、同書が伝えたのと類似の伝承が今日でも残されていた。それによると、この村の成立は、キ・アグン・パンダン・アラン (Ki Ageng Pandhan Aran) またはキ・アグン・パンダナラン (Ki Ageng Pandhanaran) と称される人物と深く関わり合っている。そこでまず、この人物について、少々予備説明をしよう。

彼については、スマラン周辺の各地に伝承が残されており、インドネシア政府教育文化省やガジャマダ大学文学部の研究者によっても、その若干がすでに採録されている⁽⁴⁾。上記の二通りの表記のうちどちらをとるべきかについては、これまでのところ定説はない。以下では、とりあえず、キア・グン・パンダン・

アランという表記に従う。Pandan の語を共有する点、また以下に紹介する話の内容から考えて、この人物が、『最終提要』の記録したSech Pandansariと同一である可能性は高い。彼の素性についても、これらの伝承の伝える内容には幾通りかのバリエーションがある。ある伝承によれば、彼はマジャパヒト王国の最後の王プラブ・ブラウィジャヤ(Prabu Brawijaya)その人であり、宗教問題についての意見の相違から彼の子供と訣別し、放浪の旅に出たとされる⁽⁵⁾。また別の伝承では、彼はデマック王国の王家の末裔であるとされている⁽⁶⁾。ここでは、時期の点から、後者の解釈の方を、より妥当なものとしておきたい。

これらの伝承によると、このキ・アグン・パンダン・アランは、スマラン地方に君臨する地方有力者であったが、1547年にパンゲラン・クスプハン(Pangeran Kesepuhan)と称される息子に地位を譲った。その息子はやがて、(おそらくデマック王国のスルタンによって)スマランの初代の県知事(ブパティ bupati)に任命され、キ・アグン・パンダン・アラン2世を襲名した。彼は、父親がすでに手をつけていた仕事、すなわち当時まだヒンドゥー、仏教を信奉する者が多かったスマランの民衆のあいだに、イスラームを広める布教事業を踏襲した。しかし、時が経つにつれて彼は初心を忘れ、俗事に没頭して布教の務めを怠るようになった。やがてその罪を悔いた彼は、ブパティの職を辞し、贖罪のためにスマランを離れてクラテン(Klaten)方面へ流浪の旅に出た。最後に彼は、クラテンのテンバヤット(Tembayat)という土地に落ち着き、そこでスナン・テンバヤット(Sunan Tembayat)あるいはスナン・バヤット(Sunan Bayat)と称される偉大なイスラームの指導者となった⁽⁷⁾。

ススカン村の伝承に登場するのは、このキ・アグン・パンダン・アラン2世である。その粗筋は、次のとおりである⁽⁸⁾。

キ・アグン・パンダン・アラン2世(以下、「2世」を略)がスマランからクラテンへの旅を行ったとき、彼の従者のひとりにキ・マンドゥン(Ki Mandung)

という人物がいた。旅の途中で彼らは、ブミルジョ (Bumirejo) という村に休憩のために立ち寄った。現在その場所には、大きな石が残されている。そのとき、キ・アグン・パンダン・アランは、従者たちに、同地にメスジッド (モスク) を建立したいと語りかけた。メスジッドに必要な不可欠な井戸を作るために、水源を探す仕事がキ・マンドゥンに命じられた。水源を求めて歩くうちにキ・マンドゥンは、クレテック・グン (Kretek Gung) と呼ばれる場所に至り、そこで、地面を竹竿で何度もつつき (tusuk あるいは susuk) ながら、地下水を探す努力を重ねた。この故事にちなんで、その土地は Susukan と呼ばれるようになり、やがて村の名前となった。

キ・マンドゥンが井戸を掘り当てると、キ・アグン・パンダン・アランは、メスジッドの建立に取り掛かった。彼は、この仕事を一夜のうちで終えようとした。しかし、夜明けが近づいたころ、彼の耳に、ゲトウック (gethuk) つまりキャッサバの餅を作る朝の仕事を始めたプダックパユン村⁽⁹⁾の住民たちの声が聞こえてきた。その声が大層かまびすしかったので、すでに昼に近づいたと勘違いしたキ・アグン・パンダン・アランは、住民たちに見られるのをおそれてメスジッドの建立を中止した。そして彼は、大声をあげて彼の事業を妨げたプダックパユンの村人たちはこのさき配偶者探しに苦しむことになるろう、またその村にはイスラームの礼拝堂 (langgar) は決して作られないだろう、とキ・マンドゥンに向かって予言した。

メスジッドの建立に失敗したあと、キ・アグン・パンダン・アランと他の従者たちは、南の方角へと旅を再開した。彼の努力が水泡に帰したことに落胆したキ・マンドゥンは、水を探すのに使った竹竿を投げ放ったところ、竹竿は北の方角に突き刺った。その場所には、現在ススカン川 (Kali Susukan) と呼ばれている川が流れていた。この川の流れの真ん中には今も、何かの突き刺さった跡の残る大きな石がある。そのときから、この川の流れの向きはデマックの方角 (北東) に変わってしまった。以来、プダックパユン村には川の水が来な

くなった。今日に至るまでこの村では稲の収穫が不可能であり、キャッサバしか収穫できないのは、このためである。

キ・マンドゥンは、旅に随行するようという誘いを拒んで、この地に留まり、プサントレン (pesantren, イスラーム寄宿塾) を建てることを希望した。その意志があまりに固いので、キ・アグン・パンダン・アランは、彼のことを鋼 (waja) のような心の持ち主だと述べた。このことから、その場所はモジョ (Maja) と呼ばれるようになった。すなわち、今日のススカン村モジョ区の名の起りである。キ・マンドゥンの建てたプサントレンは今日まで続いており、その寄宿生たちは、彼と同様に意志堅固であることで知られている。

キ・アグン・パンダン・アランがこの地を去ったとき、彼の夫人もそれに随ったが、彼女の従者のなかには踊り子 (lédhék) がいた。シロンド (Siranda) と呼ばれる土地に彼が至ると、盗賊の群れが金を要求して彼らの行く手を遮っ

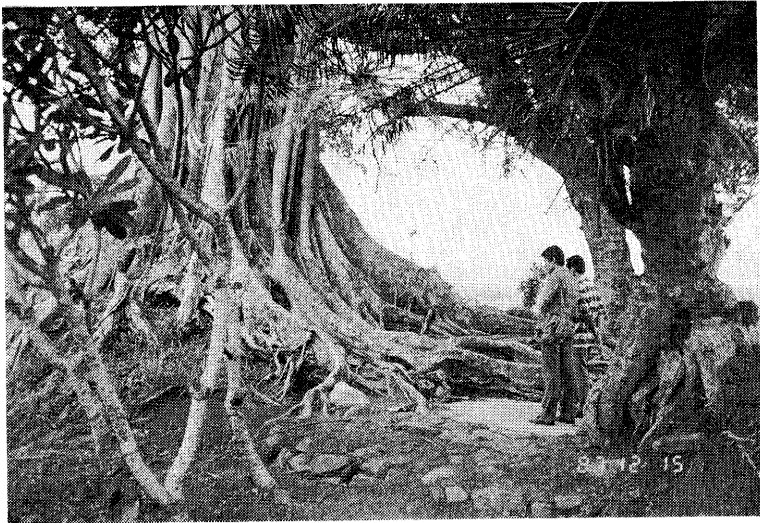


写真4 Ki Mandung 夫妻の墓所と伝えられる
Gunung Kukusan 頂きの大木。(筆者撮影)

た。金を受け取ったあとも、彼らはすぐに立ち去らなかつたばかりか、夫人と踊り子を手込めにしようとした。怒った夫人は盗賊たちに、「たわけ者め、分別もなく、！」(yén wis pepet ora étung) と叫んだ。この故事にちなんで、その土地は Petung と呼ばれるようになった。また、その隣の村は、プダックパユンの方角から見ると平ら (rata) に見えるので、Sirata あるいは Siroto と呼ばれるようになった。すなわち、今のペトゥン区およびシロト区の名の起こりである。

以上が、ススカン村に伝わる伝承のあらましである。物語の事実性についてはともかく、デマック王国の時代のイスラームの布教に開村の謂われが関係づけられていることに注目しておきたい。また、この村の域内には、Gunung Kukusan と呼ばれる小高い丘があり、その頂きの大木(写真4)の根元には、Ki Mandung 夫妻の亡骸が埋葬されている、と伝えられている⁽¹⁰⁾。

5-2. ニャトニヨノ村の開村伝承

地元では、この村はウンガラン地域で最も古い村のひとつと考えられており、その開村伝承もまた、内容豊富で興味深いものである。ここでもそれは、初期のイスラーム布教の物語に関係づけられている。布教にともなう同化と対立の過程がこの物語の核心を成しており、中心人物として登場するのは、バンバン・クルトナディ (Bambang Kertonadi) なる伝説中のヒーローである。彼の物語についても教育文化省による採録が行われているので⁽¹¹⁾、ここでは、その成果と筆者自身の村での聞き取り⁽¹²⁾の双方を照らし合わせながら、その要旨を紹介する。

バンバン・クルトナディの氏素性については、2通りの異なる物語が伝えられている。一方の伝承によれば、彼はマジャパヒト王国最後の王プラブ・ブラウィジャヤの落胤である。彼が生まれたあと、彼の母に対する王の寵愛は冷め

たため、彼女はこのひとり息子を、イスラーム九聖人 (wali sanga) のひとりとして名高いスナン・ボナン (Sunan Bonang) に預け、彼の弟子として養育するよう依頼した。バンバン・クルトナディが忠実な弟子として育ったので、スナン・ボナンは彼を自分の養子に取り立て、ロロ・ムディニ (Roro Medini) という名の自分の娘と結婚させた⁽¹³⁾。他方、別の伝承によれば、バンバン・クルトナディはデマック王国の最初の王となったラデン・パター (Raden Patah) の異母兄弟である。最初彼はマジャパヒト王国の摂政府 (kepatihan) で働いたが、やがて東ジャワ一帯を放浪し、次いでスナン・ボナンの弟子となってイスラームに入信した⁽¹⁴⁾。いずれの伝承にも共通するのは、彼がスナン・ボナンに弟子入りした、という点である。

スナン・ボナンの下で修行を積んだ彼は、やがてイスラーム布教者として自立し、名前もハサン・ムナディ (Hasan Munadi) と改めた。スナン・ボナンの命に従い、布教のためにウンガラン山を目指して旅立った彼は、まずプナワンガン (Penawangan)⁽¹⁵⁾ という名の部落に辿り着く。キ・アグン・プナワンガン (Ki Ageng Penwangan) という名の人物に統率されたこの部落の人々は彼を暖かく迎え入れ、布教活動は順調なスタートを切る。彼の門弟は日を追って増え、しまいには村人のほとんど全てがイスラームを奉じるようになった。彼に感服したキ・アグン・プナワンガンは、ナワンサリ (Nawang Sari) または通称トリマー (Trimah) という名の娘を彼と妻合わせるに至る。この村での布教に成功したハサン・ムナディは、やがて他の村々への布教にも関心をもつようになった。

プナワンガン村からさほど遠からぬところに、ンガグリック (Ngaglik)⁽¹⁶⁾ およびゴギック (Gogik)⁽¹⁷⁾ という名の2つの部落があった。いずれの村も、キ・アジャル・ブンティット (Ki Ajar Buntit) という名の者の統率下にあり、この人物は旧来の自分の信仰に固執していることで知られていた。そこで、この

2つの村が、まずハサン・ムナディの布教の目標に選ばれる。ンガグリック村への道中、彼は一匹の虎に出会い、身を守るために身に帯びていた槍を虎めがけて投げつけた。恐れた虎は、泉 (sendhang) の方角に逃げ去った。虎を追って泉にたどりついたハサン・ムナディは、そこで水浴びをしていた女たちに出会う。彼は、そのうちのひとりのルビヤー (Rubiyah) という名の女に、その土地の名前を問うたが、確かな答えが得られなかった。そこで、彼はその地をスندانガン (Sendangan)⁽¹⁸⁾と名づけた。それから彼は、ルビヤーに誘われてドクゥー (Dukuh)⁽¹⁹⁾という名の部落を訪れる。部落を率いていたのは、ルビヤーの父親でキ・チョゴモ (Ki Cogomo) という名の男であった。

ハサン・ムナディから布教の志を聞いたキ・チョゴモは、彼の携えてきた新しい教えを受け入れるよう村人たちに命じる。このため、この地での信徒の数は、比較的短期間に増加した。この間に、ハサン・ムナディとルビヤーの間柄はますます親密になったため、キ・チョゴモはついにふたりを結婚させた。この結婚から、ふたりの間には、ソトプロ (Sotopuro) という名の男子が誕生する。

この村にしばらく滞在し、満足すべき成果を挙げたハサン・ムナディは、ふたたびンガグリックとゴギックの2つの村への旅路を再開しようと決意する。両地に至った彼は、キ・アジャル・ブンティットに来訪の目的を告げた。当然のことながらキ・アジャル・ブンティットは布教を拒んだため、両者の間には深刻な紛争が生じる。双方の従者の対立は日を追って加熱し、押しつ押しされつゝのせめぎあいが続いた。この紛争の過程で、多くの新しい地名が生まれた。

あるときハサン・ムナディの一党は攻められて北に退き、とある場所で立ち止まって休憩した。従者たちの疲れ切った様子を見たハサン・ムナディは、このままでは彼らは戦いの犠牲 (banten) になるだけだと感じた。ここから、この土地は Banten と名付けられ、のちに転じて Blanten と呼ばれるようになった⁽²⁰⁾。他方、敵を退けることに成功したキ・アジャル・ブンティットたちは、

もはや安全と考え、追撃を停止した。彼らが追撃を止めた場所は Lerem (静かになる、の意) と名付けられ、転じて Lerep と呼ばれるようになった⁽²¹⁾。

しかし、ハサン・ムナディはほどなく反攻に転じ、ある朝行動を開始した。攻撃されたキ・アジャル・ブンティット一味は後退を余儀なくされ、その人数はある場所で51人 (seket iji) にまで減少した。そのため、この場所は Keci と名付けられ、のちに Keji と変わった⁽²²⁾。キ・アジャル・ブンティットは、新しい部隊を編制 (ngarang bala) することによって兵員の減少を食い止めようとした。彼が新手の部隊を編制した場所は Karangbala と名付けられ⁽²³⁾、今日に至っている。再び軍勢を増やした彼は、カラングスン (Karanggeneng)⁽²⁴⁾ の村まで後退戦を続けた。

ハサン・ムナディの軍勢はますます意気盛んに攻撃を進め、西の方角、つまりウンガラン山の方へと敵を押しやった。追い詰められたキ・アジャル・ブンティットと彼の従者たちは、井戸 (sumur) 状の谷間 (jurang) に身を潜めた。この場所は、今では Sumurjurang⁽²⁵⁾ と呼ばれている。しかし、この場所も安全ではないと思われたので、キ・アジャル・ブンティットは、従者たちに、一緒に集まって (kumpul) 大きな岩 (watu) の下に隠れるように命じた。このことを知ったハサン・ムナディは、念力を集中してこの岩を踏みつけたので、キ・アジャル・ブンティットとその一味はみな死んでしまった。この場所はやがて、Watukumpul という名の村⁽²⁶⁾ になった。

平和が戻ったあと、ハサン・ムナディはウンガラン山の麓で、しばらく静養することにした。やがて彼はメスジッドを建てようと思い、その地を離れた。その後、彼がメスジッドを建てた場所は、建立の仕事を始めて (menyat) それが実現した (ana > ono), という経緯にちなんで Nyatnyono と呼ばれるようになった。すなわち、今日のニャトニョノ村の名の起こりである。このように、デマックのメスジッドよりも古い⁽²⁷⁾メスジッドが建てられてから、この地のイスラームはますます隆盛に向かうことになった。(この言い伝えをもつメ



写真5 ニャトニョノ村のメスジッド。ハサン・ムナディが建立し、デマツク
のメスジッドより古い、という言い伝えがある。(筆者撮影)

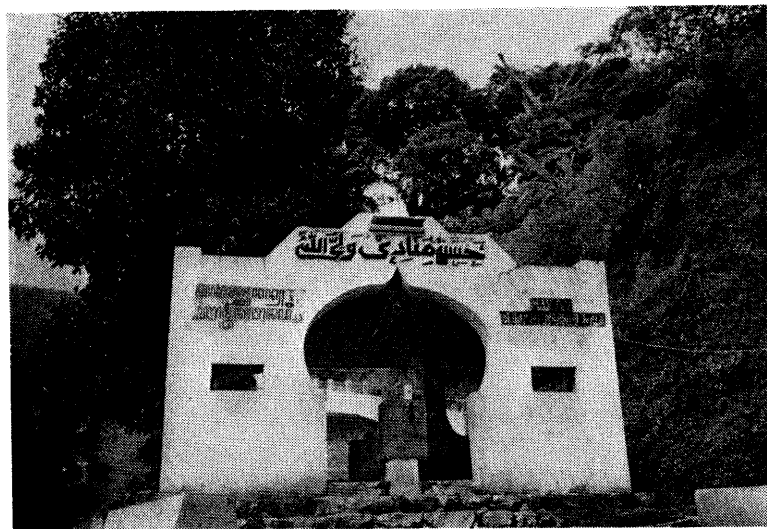


写真6 ハサン・ムナディ廟入口。アラビア文字(上)、ジャワ文字(左)、
ローマ字(右)の3通りで表記されている。(筆者撮影)

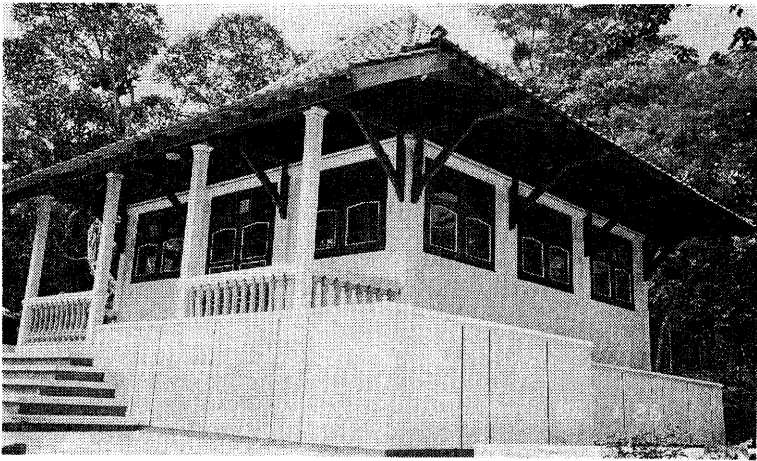


写真7 ハサン・ムナディ廟の建物のひとつ。この建物には彼の子孫の墓が安置されている。(筆者撮影)



写真8 ハサン・ムナディの墓。ガラス窓の向こうに黄色と白色の布を掛けて安置されている。(筆者撮影)

スジッドは、今でも健在である——写真5。)

ハサン・ムナディは以後終生ニャトニョノ村に留まり、彼の死後は、布教の仕事はハサン・ディプロ (Hasan Dipura) という名の彼の子供によって引き継がれた。ハサン・ムナディの没年については確かな証拠がないが、1987年に彼の没後468年記念の行事が行われたことから推定して、西暦1520年頃のことであったとも推測される。(上記メスジッドの裏山の頂きには、ハサン・ムナディと彼の家族の立派な廟が今でも祀られている——写真6～8。)

以上が、ハサン・ムナディの生涯とニャトニョノ村の開村についての伝承の粗筋である。この場合も、それがどこまで史実に合致しているかは疑いの余地が多い(——とって、さしあたり検証の手段もないが)。しかし、ススカン村の場合と同じく、村の起こりが、16世紀のイスラーム布教の物語に関係づけられている点は、はなはだ興味深い。個々の地名の起源に関するエピソードの真偽は別として、この地域の多くの村がこの時代に形成されたことは、ほぼ確実と考えるとよいように思われる。

5—3. ケジ村の開村伝承

ケジ村に伝わる開村伝承⁽²⁸⁾では、Keji という地名の謂われには、上記のハサン・ムナディの英雄譚とは異なった説明が与えられている。

それによると、この村の開祖は、バ・キヤイ・ハジ (Mbah Kyai Haji) という尊称のみが今に伝わる人物であった。Keji という語は、「東ねてひとつになる」(diiket dadi siji) という言葉に由来する、とされている。それは、かつては別々の村を成し、住民同士がつねに対立していたジュラン (Njurang) とクラジャン (Krajan) の2つの集落がひとつの村に統合された際につくられた新村名である。それまでは、ジュラン集落はスモールジュラン (Sumurjurang) 村に所属した、とこの言い伝えは説明している。他方、ケジ村の他の区名については、次のような伝承が残されている。

まず、スルハン (Suruhan) 区の地名は、*suruh* という語に由来するが、それは *kesusu weruh* (知るのが早すぎる) という語の省略形である。その意味するところは、「男女の関係の秘密について早熟な知識をもちたがる」ということで、近年まで早婚の故に知られたこの区の住民の、昔からの性癖を揶揄したものであった、という。しかし、この話は、いかにも後年のこじつけという感じがはっきりしており、真の語源を示すものとは思えない。

次に、ストヨ (Setoyo) 区の地名起源は、この集落の開祖であるタリロゴ (Taliraga) という人物の物語に関連づけられている。それによると、タリロゴは齋戒 (*tirakat*) してこの地に水源を求め、シディンピル (Sidimpir) という場所でそれを発見した。この水源の水 (*toya* > *toyo*) は一年中潤れることがなく、それどころか病気を治す靈験さえ備えていた。これにちなんで、この場所はストヨと名付けられた、という。

ケジ村の伝承でもうひとつ興味を引いたのは、バ・スロウォノ (Mbah Surowono) という人物の墓とされる場所についての言い伝えである。この墓地は、隣村であるカリシディ (Kalisidi) 村のゲブック (Gebuk) 区の東側にある。言い伝えでは、バ・スロウォノは昔キ・アグン・ウンガランに敵対した人物で、その墓は、現在に至るまで神聖な場所と見なされている。古来、この墓地を通過するのは、政府の役人にとってタブー (*wewalar*) とされてきた。もしこのタブーを冒せば、その役人は解任または左遷の憂きめにあると信じられてきたからである。また、この墓地に立ち入った鶏はみな行方知れずになる、墓地に生えたプリンビの実を食べると腹痛を起こす、などの話も伝えられている。村役人によれば、ごく近年も、上記のタブーを冒して災厄に遇ったよそ者の実例がある。ひとつはこの場所で羊を放牧しようとした農村実習の大学生たちの例であり、もうひとつは、そこで測量を実施したバンドン工業大学の技師たちのチームである。いずれも、その後事故に遇うなどの災難を経験している。また、ずっと昔、この墓地は北東のプダックパユン村の方角からオランダ

人の砲撃を受けたことがあるが、砲弾はひとつも命中しなかった、という。

以上の伝承は、いずれも断片的で、大半は荒唐無稽なものであるが、村の歴史の古さを示す材料としては、多少の意味があると考えられる。

5—4. グダンアナック村の開村伝承

村役人からの聞き取りによると、この村には、村名の由来に関して次の伝承が残されている。

昔々、イスラームの聖人 (wali) の血筋を引く2人の兄弟がおり、兄はニャトニョノ村に住み、妹は今のグダンアナック村にあたる土地に住んでいた。彼女は何度も結婚したが、ひとりも子供 (anak) に恵まれなかった。最後に彼女は、ワリ・スongoジョ (Wali Sengaja) という名の村人と結ばれたが、やはり子宝に恵まれなかった。すると、デマックへ出掛けて何か良い知恵を授かるように、という忠告をする者がいた。この忠告に従い、夫婦がデマックに出向くと、子宝を得るための手引きと一本の黒いバナナ (gedhang) が与えられた。これを持ち帰って植えると、やがて彼女は懐妊し、同時にバナナの樹には実がついた。この故事にちなんで、この村は Gedanganak と名付けられた。くだんのバナナの樹の末裔は、今でも村役場の庭に生えている。

何やらエロティックな隠喩さえ感じられる話であるが、事の真偽は別として、ここでもイスラームの聖人やデマックの王国に、村の起源が関係づけられていることに注目したい。やはり、16世紀頃に村の起源が遡ることを示唆する伝承である。

5—5. 小 括

ススカン村やニャトニョノ村の伝承は、貴種の血を引く流浪者の物語の形をとっている点で、ジャワのあちこちに広がっている同種の伝説と類似のパターンを踏襲している。それが、デマック、スマランなど、北海岸の諸都市から南

進する16世紀のイスラームの布教の物語と重ね合わせられている点に、この地方の開村伝承の特色が見出される。個々の物語の事実性は別として、このことは、この地方の最古の村々がほぼこの時代には成立していたことを示唆している、と理解してよいと思う。19世紀初めの史料に現れる古村落の起源は、植民地期よりもはるかに古いのである。

流浪する貴種の布教者が村の開祖とされている点については、どうであろうか。村の起源にイスラームや王国とつながる権威を付与する、という作為が伝承の形成に介在したであろうことを考えれば、それを額面どおり受け取る必要はない、と筆者は考える。むしろ注目したいのは、物語の脇役として登場する、Ki....., Ki Ageng..... という尊称で語られる地つきの村の統率者たちの存在である。同種の人々は、16世紀後半のマタラム王朝の形成にまつわるさまざまな物語にも、頻繁に登場することが知られている。そして、マタラム王朝の初期の支配者自身が、このような地方ごとの小支配者の群れの中から頭角を現してくるのである⁽²⁹⁾。このことから推測すると、マジャパヒト王朝の解体(15世紀前半)からマタラム王朝の成立(16世紀末)までの、言わば星雲状態に政治権力が拡散した過渡期に、中部ジャワの多くの地域では、現在にまで引き継がれる小村落が形成され、それぞれの村落を基盤として、このような小支配者が大小無数に割拠する状況が成立していたのではないか、と思われる。とすれば、村落の起源は、オランダ植民地支配はおろか、マタラムに代表される近世ジャワの王権よりも古いことになる。

1 W. B. Bergsma (ed.), *Eindresume van het onderzoek naar de rechten van den inlander op grond op Java en Madoera*, 3 vols., Batavia, 1876-96. 以下、注では *EROG* と略。

2 *EROG*, Vol. 2, p. 142.

3 以下の要約と紹介は、1987年12月から1988年1月にかけて筆者が、ガジャマダ大学文学部歴史学科講師の Andry Nurcahya 氏とともに行った実地調査の成果にもとづいている。ジャワ語で行われた聞き取り調査の録音テープを起こし、その内容

を整理してインドネシア語の原稿にまとめる作業を分担された Andry 氏の協力に感謝したい。村の伝承に関わる部分は、大半がこの原稿にもとづいて記述されている。

- 4 Daru Suprpta et al., *Kekunaan di Bayat Klaten*, Yogyakarta, 1974. Soewignjo, *Ki Ageng Pandan Arang*, Jakarta, 1978. Ahmad Yunus et al. (eds.), *Cerita Rakyat Daerah Jawa Tengah*, Jakarta, 1986.
- 5 Daru Suprpta et al., *op. cit.*, p. 46.
- 6 Soewignjo, *op. cit.*, p. 69.
- 7 Ahmad Yunus et al. (eds.), *op. cit.*, p. 43.
- 8 以下は、1987年12月15日に行ったススカン村村長 Martono 氏とのインタビューにもとづく。
- 9 南スマラン郡に現存の村。古村落の Pedag Pajoon Wetan, 1846年の Poedak paijong koelon および Poedak paijong wetan に対応。
- 10 奇妙なことに、同じ場所に現在では、観音菩薩を祀る小さな仏教寺院が建てられており、華人の参詣客がしばしば訪れている。
- 11 Bambang Suwondo (ed.), *Cerita Rakyat Daerah Jawa Tengah*, Jakarta, 1980-81.
- 12 1988年1月25日のニャトニョノ村村役人との、また1月26日の同村 Blanten 区居住の宗教指導者(ナフダトゥール・ウラマ所属) Kyai Asmu'i 氏とのインタビューにもとづく。
- 13 Bambang Suwondo (ed.), *op. cit.*, p. 42.
- 14 前掲 Kyai Asmu'i 氏とのインタビュー。
- 15 この村の名は、19世紀初めの古村落リスト中には発見できない。
- 16 古村落の Aglik および現在のニャトニョノ村 Ngaglik 区に対応。
- 17 1846年の Gogik 村および現在の Gogik 村 Gogik 区に対応。
- 18 古村落および1846年の Sendangan, また現在のニャトニョノ村 Sendangputri, Sendangrejo 両区に対応。
- 19 古村落の Doeko に対応。
- 20 古村落および1846年の Blanten, また現在のニャトニョノ村 Blanten 区に対応。
- 21 古村落の Lerep Demmang および現在の Lerep 村 Lerep 区に対応。
- 22 古村落中の Keyi を冠した3村, 1846年の Kedjie, および現在の Keji 村 Krajan 区に対応。
- 23 古村落の Kawis Bolo および現在の Lerep 村 Karangbolo 区に対応。

- 24 古村落の Karang Goenoeng, 1846年の Karang geneng, および現在の Sumurjurang 村 Karang Geneng 区に対応。
- 25 古村落の Soemoer Joeran, 1846年の Soemoer Djoerang, および現在の Sumurjurang 村 Sumurjurang 区に対応。
- 26 所在不明。あるいは、古村落の Selo Gemoeloong, 現在の Patemon 村 Watusari 区のことか？
- 27 ハサン・ムナディが、デマックのメスジッドの建立に参加するよう、ラデン・ラフマツ (Raden Rahmat) から召集された、という別の伝承からの推定。デマックのメスジッドは、ふつうジャワで最古のメスジッドと考えられている。
- 28 1987年12月15日のケジ村村長とのインタビューにもとづく。
- 29 Djoko Suryo, “Kisah Senapati—Ki Ageng Mangir dalam Historiografi Sejarah Kritis,” in T. Ibrahim Alfian et al. (eds.), *Dari Babad dan Hikayat sampai Sejarah Kritis*, Yogyakarta, 1987, pp. 102–119.

Ⅵ. 村落の人口規模の変化

ジャワ村落の起源や性格を論じたこれまでの議論の大半は、村落の人口規模とその変化の問題については、あまり深い関心を払ってこなかった。しかし、村落構造の歴史的変化を考える場合、これはきわめて重要な問題である。なぜなら、村落の社会経済的特質は、さまざまな面で、増加人口を村落内に収容するメカニズムと深く関わり合っているからである。幸い、これまで我々が収集した旧ウンガラン郡の村々についてのデータと情報からは、個々の村の人口規模の比較的長期間の変化の様子を明らかにすることができる。以下、いくつかの分析を試みることにしよう。

まず、表 8, 9, 10は、1846年にプレーケルが記録した付録 B の 90か村を、世帯数、人口、平均家族規模（1世帯あたり人口）の大小に応じて分類したものである。これらの表からは、次の事柄が読み取れる。

① 表 8, 9 から分かるように、個々の村落の人口規模には、きわめて大きなばらつきが見られる。このことは、居住単位としての村落が、人口規模に関

表8 90か村の世帯数別分布 (1846年)

世帯数	村落数
>500	1
200—499	3
100—199	12
50—99	25
20—49	27
10—19	20
<10	2
90か村計=5,959世帯	
1村平均=66世帯	

(出所) 付録B。

表9 90か村の人口別分布 (1846年)

人口	村落数
>1000	1
500—999	6
300—499	15
200—299	13
100—199	25
50—99	18
<50	12
90か村計=19,929人	
1村平均=221人	

(出所) 付録B。

表10 90か村の平均家族規模別分布 (1846年)

平均家族規模	村落数
>4.00	7
3.75—3.99	13
3.50—3.74	15
3.25—3.50	26
3.00—3.24	17
2.75—3.00	8
<2.75	4
90か村平均=3.34人	

(出所) 付録B。

してきわめてフレキシブルであり、増加人口に対する潜在的吸収力が強かったことを暗示している。

② 表10の平均家族規模がきわめて小さいことから示唆されるように、プレーケルが記録した村の人口は、かなり過小評価になっている可能性が大きい。このような人口の過小評価は、おそらく、賦役や租税負担の増加を恐れる村役人たちの、人口数過小申告に起因するものと思われる⁽¹⁾。

③ しかし、これらの過小評価を考慮しても、これら90か村の平均世帯数と人口は、今日の行政村落のそれと比べてはるかに小さい。このことは、表11のデータとの比較からも明らかであろう。

④ 19世紀前半の数十年間に行われたはずの村落合併と、同じ期間の人口増加とを考慮すると、同世紀初めの古村落の人口規模は、もっと小さいものであったと推定される。おそらく1村あたりの平均世帯数は30戸未満、人口は150人を下回ったであろうと考えられる。このことは、古村落が比較的小規模の社会集団であり、その成員の間には、日常生活上の顔見知りの関係(共同面識空間)が恒常的に維持されており、村社会の支配者と被支配者との間にも日常的

表11 ウンガラン郡 8 村の世帯数と人口 (1987年)

村名	区数	世帯数	人口	村名	区数	世帯数	人口
Kl. Ungaran	6	1,803	8,212	Kl. Candirejo	3	n. a.	2,079
Kl. Bandarjo	4	1,206	6,054	Kl. Gedanganak	5	n. a.	4,417
Kl. Susukan	5	669	3,687	Kl. Sidomulyo	4	536	2,443
Ds. Keji	3	345	1,461				
Ds. Nyatnyono	8	1,080	4,353	1 村あたり平均		940 ⁽¹⁾	4,111 ⁽²⁾

(1) 6 村平均。 (2) 8 村平均。

(出所) 8 村調査。

に機能する patronage link が成立していたであろうことを示唆する。そこで今度は、現在の区のレベルでの世帯数と人口の規模を検証しよう。まず、表12は、すでに述べた現ウンガラン郡の 8 村調査で明らかになった区別の人口と、これに対応する1846年の村落の人口を比較したものである。現在の区の人口は、1846年の行政村落の平均 3 倍以上に増加していることがわかる。しかも、すでに述べたことから明らかのように、1846年の行政村落の地理的規模は、一般に現在の区よりもすでにかなり大きかったと見られるから、実際の人口増加はもっと多かったと考えるべきである。

この 8 村調査ではわずか 7 区についてしか、過去の人口との比較が行えない。現在のウンガラン郡の役場では区レベルの人口統計が得られないので、これ以上の検討は不可能である。しかし、幸いなことに、グヌンパティ郡については、表13のように大部分の区について1987年の世帯数を明示した統計を入手することができた。1 区あたりの世帯数は、最も大きいもので 300 世帯以上、小さいものでは 20 世帯以下とばらつきが見られるが、平均値は 100 世帯余りになる。

そこで次に、表13の諸区のうち旧ウンガラン郡内に位置し、1846年の村落に名前が対応するものだけを選び出し、対照表を作ると表14ようになる。この表からも、現在の区の世帯数は1846年の行政村落よりも一般にはるかに多いこ

表12 ウンガララン郡4村の区別人口(1987年)と1846年の対応村落

1987年			1846年			A/C	B/D
村/区名	世帯数 A	人口 B	村落名	世帯数 C	人口 D		
SUSUKAN							
Petung	n. a.	733					
Siroto	n. a.	466					
Mojo	n. a.	818					
Krajan	n. a.	988※	Soesoekan	144	523		1.89
Kali Gawe	n. a.	682					
KEJI							
Krajan	168	n. a.	Kedjie	45	176	3.73	
Suruan	87	n. a.					
Setoyo	90	n. a.					
CANDIREJO							
Ngablak Bugangan							
	n. a.	542					
Krajan	n. a.	815※	Tjandie	92	302		2.70
Siroto Babadan	n. a.	722※	Babadan	65	248		2.91
SIDOMULYO							
Paren	n. a.	817※	Pareng	31	116		7.04
Muneng	n. a.	733※	Muneng	17	66		12.22
Putatan	n. a.	605※	Poetatan	17	50		12.10
Sidosari	n. a.	251					
合計 (※印の6区)		4,680	合計	1,305		3.59	

とが分かる。ちなみに両者の比率の平均値を計算すると、前者は後者のきっかり3倍となり、さきに見たウンガララン郡の場合の人口増加比率とほぼ同じになる。もっとも、ここでも1846年の行政村落の地理的規模は現在の区より大きい場合が多いので、実際の増加比率はこれよりさらに大きいはずである。ここで例外をなすのは、世帯数にほとんど増加がないか減少している Sumurjurang, Sumurgunung の2区であるが、これはおそらく1846年の行政村落が複数の集落を包含しており、現在では当時の中心集落以外の集落が独立の区を形成して

表13 グヌンパティ郡⁽¹⁾の区と世帯数一覧 (1987年)

村/区	世帯数	村/区	世帯数	村/区	世帯数
PAKINTELAN		PLALANGAN		PONGANGAN	
Pakintelan Barat	143	Kerajan	126	Randusari	132
Pakintelan Timur	138	Sabangan	87	Gondang Ngrau	58
Winongsari	63	Wonosari	83	Pongangan	131
		Terwidi	153	Balongsari	72
NONGKOSAWIT		CEPOKO		SEKARAN	
Nongkosawit	120	Sukorame	35	Banaran	348
MANGUNSARI		Cepoko	118	Bantardowo	75
Mranggen	22	Mundingan	109	Trangkil	25
Kepil	61	Kandri	201	Delik Rejosari	21
Salakan	19	Siwarak	105	Persen/Ngasinan	104
Krajan	161	Talun Kacang	72	Krajan	385
Kalirejo	40	Jedung	99		
Pengkol	125			GUNUNGPATI	
SADENG		SUMURGUNUNG		Ngrembal	n. a.
Kwajén	70	Karangsari	132	Kepok	n. a.
Disel	72	Jongkong	51	Getas	n. a.
Bendosari	16	Sumurgunung	144	Sikunir	n. a.
Ngelo	13			Karanganyar Lor	n. a.
Jogoprono	62	NGIJO		Karanganyar Kidul	n. a.
Gisik	21	Kalisegoro	82	Ngabean	n. a.
Bukit Meripen	52	Sedayu	83	Jagalan	n. a.
		Krajan	300	Sikrangeng	n. a.
SUKOREJO		Rejosari	79	Jetis Trawas	n. a.
Kalialig	70	Puritan	76	Kliwonan	n. a.
Bangsewu	40			Péréngsari	n. a.
Dung Wadas	35	PATEMON		Nglarang	n. a.
Delik	98	Krajan	348	Perbalan	n. a.
Perum UNDIP	80	Ampelgading	117	Siroto	n. a.
Perum IKIP	55	Muntal	134	Malon	n. a.
Kradenan Lama	50	Watusari	117	Sekalongan	n. a.
Kradenan Baru	44				
JATIREJO		SUMURJURANG			
Krajan	154	Sumurjurang	143	平均 (Gunungpati村	
Ngablak	42	Kaum/Dampyak	84	を除く)	107
Sirayu	40	Karang geneng	190		
		Kebon Manis	115		
		Pager Salam	90		

(1)旧ウンガラン郡外の地域を含む同郡の全体。

(出所) グヌンパティ郡役場で聞き取り。

表14 グモンパティ郡14区と1846年の対応村落における世帯数比較

1846年の村落	世帯数 A	1987年の区	世帯数 B	B/A
Pakintelan	36	Pakintelan Barat	143	}281 7.8
		Pakintelan Timur	138	
Pingkol goenoeng	15	Pengkol	125	8.3
Plalangan	74	Krajan Plalangan	126	1.7
Wonosahari	13	Wonosari	83	6.4
Terwidie	13	Terwidi	153	11.8
Patemon	19	Krajan Patemon	348	18.3
Ampel Gading	16	Ampel Gading	117	7.3
Moental	58	Muntal	134	2.3
Soemoer djoerang	165	Sumurjurang	143	0.9
Karang gening	29	Karang Geneng	190	6.6
Soemoer goenoeng	140	Sumurgunung	144	1.0
Ngijo	77	Krajan Ngijo	300	3.9
Sekaran koelon	95	Krajan Sekaran	385	2.4
Sekaran wetan	68			
合 計	818	合 計	2,446	3.0

(出所) 付録Bおよび表13。

離脱しているためであろう。

以上の観察から、現在の区は、たとえ地理的規模の点では19世紀初めの古村落とほぼ一致するとしても、人口規模においてははるかに大きなものに膨張していることが明らかになる。今かりに19世紀初めの村落の1村あたりの世帯数を平均20世帯程度と仮定すれば、その膨張の程度は、約180年間に5倍増くらいと見積もられる。

同一の地理的規模の農業集落内での驚くべき人口増加が近現代ジャワの経済史の顕著な現象のひとつであることは、以上の事例観察からも証明される。このような海綿状とでも形容すべき村落内への人口吸収は、稲作を含めた種々の経済活動の増加なしには不可能であったはずである。とすれば、それは村落の

社会構造にも大きな変化をもたらさずにはいなかったと考えられる。これは、今後の大きな研究課題である。

- 1 次の指摘をも参照。Bram Peper, “Population Growth in Java in the 19th Century,” in C. Fasseur (ed.), *Geld en geweten; Een bundel opstellen over anderhalve eeuw Nederlands bestuur in de Indonesische archipel*, Den Haag, 1980, pp. 135-139.

Ⅶ. 耕地共有制度の発生と消滅

土地所有形態の特徴とその変化、なかでも、いわゆる耕地共有制の展開と変容の問題は、以前からジャワの農村史研究者の関心をひきつけてきた問題である。それが村落構造の変化の問題と深く結びついているであろうことは、想像に難くない。

筆者自身を含め、我が国の複数の研究者によって1970年代以降検討の素材とされてきた19世紀の土地権調査報告書『最終提要』（第Ⅴ節冒頭を参照）は、1860年代におけるウンガラン郡の2つの村について、土地制度に関する情報を収録している⁽¹⁾。2つの村とは、すでに述べたパススカン（Pasoesoekan）村と、ババダン（Babadan）村である。パススカン村が、現在のスカン村 Krajan 区に該当することはすでに述べたとおりである。ババダン村については特定が困難である。筆者が実地に調べた範囲だけでも、同名の3つの区または集落が現存する。第1はニャトニョノ村 Krajan 区の Babadan 集落、第2はチャンドイルジョ村 Siroto 区の Babadan 集落、第3はグダンアナック村の Babadan 区である。後述するように、『最終提要』のババダン村の耕地はもっぱら水田のみで畑はないとされていることから推測すると、比較的高地に所在するニャトニョノ村の Babadan 集落が該当する可能性は低い。おそらく、後二者のうちのいずれかであろう。

『最終提要』によれば、パススカン村には69.5バウ (=49.3ヘクタール) の水田 (sawah) があり⁽²⁾、うち48バウが「共同占有」(gemeen bezit)、5バウが村長の職田 (ambtsveld)、残り16.5バウが他の村役人の職田とされている。「世襲的個別的占有」(erfelijk individueel bezit、現在ウンガラン地域の人々が記憶しているジャワ語の表現では yasan または beran) の水田はこの村には存在しない。もっとも、「共同占有」の水田の持分は、持分保有者がその義務を怠らないかぎり、定期的割替えの対象にはならず固定される傾向にあった、と記録されている⁽³⁾。水田の他に、この村には650バウにおよぶ広大な畑地 (tegal) があった。うち629バウはやはり「共同占有」の形態をとっており、10バウが村長職田、10.5バウが他の村役人の職田として利用されていた。ただし、村長職田の畑のうち9バウは、9人の「部落長」(hoofden van gehuchten) に対して割り当てられていた、という。この「部落長」なるものが何を指すか明らかでないが、行政村落に統合される以前の古村落のリーダーたちを指す可能性もある。いずれにせよ、当時のパススカン村が、すでに複数の集落を内部に含むかなり広域の行政村落の形をとっていたことは、この点からも明らかである。以上の他に、この村には面積不明のコーヒー園用地も存在した。『最終提要』は、それ以上何も記録を残していないが、おそらくヨーロッパ人の経営する農園であろう⁽⁴⁾。

一方、ババダン村には99.25バウの水田が存在するが、畑地は全くない。この水田の内訳は、「共同占有」田が78.25バウ、村長職田が9バウ、その他の村役人職田が12バウとなっている。「世襲的個別的占有」の田はやはり存在しない。

筆者がオランダで発見した史料には、19世紀初めのウンガラン郡の土地所有形態についての情報は全く含まれていない。しかし、1780年から1870年の時期のジャワの土地所有に関して、オランダ語原史料を駆使して行われたオランダの経済史家ピーター・ボームハールドの最近の研究が、この時代のウンガラン

地域における土地所有形態についても、有益な情報を提供している⁽⁵⁾。

ボームハールドによると、イギリス統治時代の1813年に地稅制度が導入される以前にも、多くの賦役労働を植民地政府に供給していたスマラン地方のいくつかの地域では、耕地の多くの部分がすでに、サワー・デサ (sawah desa) すなわち『最終提要』など後の史料の言う「共同占有」地（あるいは、今日なおウンガラン郡の人々の記憶に留められている用語では sanggem）として控除されていた。そのため、この地方のいくつかの郡では、およそ1800年頃から、この土地所有形態が優勢になっていた。けれども、ウンガラン郡に限って言えば、賦役労働の供給（または本人の代わりに従者の労働力の提供）を義務づけられていた個々の土地保有者（シクップ sikep の名で表現）に対して、米の割当量を記録した史料も残されている、という⁽⁶⁾。つまり、当時のウンガランでは、賦役労働負担に対する代償として、「共同占有」耕地の持分ではなく米が村から給付されたわけである。

もしこの解釈が正しければ、この時代のウンガラン郡では、水田の「共同占有」はまだ優勢な土地所有形態になっておらず、多くの耕地が、従属民を村内に抱える上層村民すなわちシクップたちによって、個別に「所有」されていた可能性は高い。しかし、かりに、「共同占有」制はなお存在しなかったとしても、そのことは村の共同体的性格を否定するものではなく、むしろ小規模な居住共同体としての村落の内部に、シクップとその従属民たちの間のいわゆる patronage link と、シクップたち同士の間関係の双方によって織りなされた、自然発生的な社会的結合関係が存在し、機能していたことを想像させる。耕地の「共同占有」が、賦役やその他の租稅負担の重圧の結果として発生した可能性は高い。だが、そのような所有形態の導入は、政府が意図的に行ったものであれ、農民の自発的な対応の結果であれ、そのような制度の運用を可能にする村人との間の現実の社会的結合が前もって存在しなければ、およそ不可能であったに違いない。つまり、村落の共同体的社会関係は、耕地の「共同占有」制の

発生に先立って存在したはずである。

前記『最終提要』の記述では、1860年代にはすでに、新規に開墾された田でも3年を経過した後は全て「共同占有」に移行する、という慣行が確立していた。また、開墾にあたっては、耕地、屋敷地の別なく、村役人の許可が必要であった⁽⁷⁾。1870年代以降に、この地域の土地所有形態に生じた変化については、筆者はまだ十分な調査を行っていないし、そのために必要な資料も集めることができずにいる。ただ、年刊の政府報告書『植民地報告』1895年版の付属資料によると、この時期のウンガラン郡では、全耕地の90%以上が、なお「共同占有」の形態をとっていたことが分かる⁽⁸⁾。おそらく、20世紀に入ってから相当長期にわたって、この制度は存続したと推測される。これらの「共同占有」田で持分の定期的割替えが実施されたことがあるかどうかは、今のところ判断する材料が得られない。

すでに第Ⅳ節で述べたように、現在のウンガラン郡のいくつかの村での筆者の聞き取り調査では、耕地の「共同占有」制はすでに消滅して久しい。遅くとも1960年の農地基本法の施行以降は、それは完全に一掃された、と考えてよさそうである。多くの行政村落で、職田 (bengkok) の制度はなお維持されているが、近年「都市部」に認定されたところでは、少なくとも村長の職田については、政府支給の俸給への代替が行われている。19世紀末以降の数十年間に、「共同占有」の「個別占有」への実質的变化が進行し、農地基本法の施行によってその仕上げが行われた、と解釈してよいのではなからうか。「共同占有」制消滅の最大の要因は、おそらく、その発生要因でもあった賦役やその他の租税負担の廃止であったと思われる。しかし、この点については、今後いっそうの研究が必要である。

他方この期間には、かつて「共同占有」の枠組みを提供した村落の側にも、大きな変化が生じた。何よりも注目されるのは、すでに指摘したような、村落合併政策と人口増加の双方による、行政村落の地理的、人口的規模の著しい膨

張である。今かりに、かつてのような「共同占有」の慣行が復活させられたとしても、現在の行政村落は、そのような制度を運用するうえで実効ある役割を演じることはできないであろう。今のように多数の人口の村人の間に耕地の再配分を実施するのは恐ろしく複雑な仕事になるであろうし、現在の行政村落の制度には、そのような仕事を円滑に行ううえで必要な自然発生的、共同体的な社会結合の基盤がもはや欠如しているからである。では、これもかりに、現在の区や小集落のレベルでそのような試みがなされたとしたら、どうであろうか。区や小集落がかつての古村落の真実の継承者であるとしても、それはやはり容易なことではないであろう。なぜなら、区の人口はやはり古村落に比べてはるかに大きくなっており、共同面識空間として適当な規模を超えてしまっている場合も少なくないからである。また、現在の村落行政制度のもとでは、区や小集落がそのような権限をもちえないことは言うまでもない。このような面でも、人口増加は、ジャワ村落の社会経済的性格の変化を生じさせた最も重要な要因のひとつであったと言える。

- 1 EROG, Vol. 1, Appendix A.
- 2 1バウ (bouw) は、0.7096ヘクタールに相当。
- 3 EROG, Vol. 2, p. 150.
- 4 時代は大分下るが、1919年刊行の『蘭印百科辞典』第2版の OENGARAN の項には、24か所の永借地権設定地 (erfpachtsperceelen) で操業する12の農園企業が同郡内にあり、コーヒー、カカオ、キナ、ナツメグ、ゴムが栽培されている、という記述がある。D. G. Stibbe (ed.), *Encyclopaedie van Nederlandsch Oost Indië*, Vol. 2, Den Haag & Leiden, 1919, p. 68.
- 5 Peter Boomgaard, *Between Sovereign Domain and Servile Tenure: The Development of Rights to Land in Java, 1780-1870*, Amsterdam, 1989. この論文でボームハールドがウンガラン郡について用いている史料は、1806年に書かれた“Rapport Unarang”という題の文書である。この文書は、オランダ国立公文書館の Van Alphen & Engelhard collection に収録されているはずであるが、筆者は未見である。

- 6 Peter Boomgaard, *op. cit.*, p. 20.
- 7 *EROG*, Vol. 2, pp. 145-146.
- 8 *Koloniaal verslag 1895*, Appendix.

VIII. 稲作と人口変化

すでに指摘したウンガラン地域の事例からも明らかのように、19世紀から今に至るまで、ジャワ村落の内部で生じた人口増加はきわめて著しい。これは、複数の古村落を併合した行政村落の場合だけではなく、古村落との継続性をもつ現在の区についても妥当する。筆者の理解では、増加人口に対するこの海綿状の持続的な吸収力は、ジャワの村落社会の顕著な特徴である。例えば、これは、江戸時代から最近までの日本の村落社会の場合とは、著しく対照的である。村落史や歴史人口学の研究成果を見ると、一般に近世日本の農業村落は、長期間にわたって、あまり大きな変動のない人口規模を維持し続けたように思われるからである。何が、このような人口増加への対応様式の差違をもたらしたかは、今後の重要な比較経済史的研究課題のひとつになるであろう。

近現代ジャワの社会経済史研究で今日まで優勢な理論によれば、ジャワの農業村落の人口吸収的、膨張的性格は、水稻生産に固有な生態システムが、植民地支配のもたらした二重経済構造（とくにオランダ企業による輸出向け砂糖生産と自給的稲作との接合）とあいまって発生させた「農業インボリューション」の過程に帰着する⁽¹⁾。しかし、この理論の妥当性には、ウンガラン地域の事例に限って考えてみても、多くの疑問が生じる。この地域の人口増加と村落内への人口吸収を可能にした主要因ははたして稲作の発展なのであろうか。以下、ウンガラン地域の稲作について、当面知りうる限りでのデータと情報を整理することによって、この問題を考える糸口を明らかにしておきたい。

8-1. ウンガラン地域の伝統的稲作

かつてウンガラン地域は、中部ジャワの中でも、早くから開けた稲作地帯のひとつであったように思われる。これは、17世紀にスマランからマタラム王朝の王都へ旅した東インド会社社員フーンズ (R. V. Goens) の紀行文⁽²⁾からも窺うことができる。我が国では、すでに大木昌氏が、炯眼にもこの史料の記述に着目され、氏のジャワ稲作史研究の素材として援用されているが⁽³⁾、ここでもそれを引き合いに出すことにしよう。おそらく、17世紀のオランダ側の史料で、当時の稲作の有様を描いたものはこれ以外にはきわめて少ないと考えられる。ただし、この史料の記述の解釈と評価について、後述のように筆者は大木氏とかなり異なる考えをもっているため、その点を明らかにするためにも、まず、フーンズの記述の該当部分⁽⁴⁾の全訳を以下に掲げる。

さきに訳出した19世紀のプレーケルの紀行文と同じく、フーンズの記述もまた、スマランからの旅路の描写によって始まる。まず、スマランの町自体については、次のように記されている。

「スマラン (Samâranh) は、美しいかなり大きなジャワの沿岸都市であるが、城壁はめぐらしていない。住民は2万ないし2万5千世帯ほどで、(私見では) 3万人の男と1万人の女・子供から成っており、漁業、伐木、農耕、木挽、稲作 (rijstplanten)、その他若干の質素な生業によって暮らしを立てている。ここからは通常、王の使節たちが、大勢の随員と行列を引き連れて、(他のあらゆる国にもまして) オランダの使節たちを高地へと護送することになる。」(傍線筆者、以下同様。)

次に、スマランからウンガランまでの道中については、次のとおりである。

「スマランからは、おおむね南へと旅路が続く。最初の前山を越えるのに第1日が費やされるが、この間6マイルの距離に、8から10を下らぬ数の村々が道沿いに存在する。いずれも60、70から100世帯ほどが住んでおり、最南部の

村々を除けばいずれも稲作 (rijstplanten) を生業としている。」

さて、ウンガラン自体については、次のように記述されている。

「スマランを發つて最初の休息所は、6マイルの距離にある、オンガラン (Ongáran) という名の村である。この村は、村と同じ名前の、高くて大層美しい山の麓に位置する。この山の頂はたいい雲に覆われているにもかかわらず、おおむね山腹の高所まで耕されており、黒い砂糖 (swarte suijcker) [砂糖ヤシの意か——筆者] やその他の果樹が植えられ、流れ下る湧き水によって、つねに潤いを与えられている。まさにこの地から、造化のたくみの所産であるこの島は、筆舌に尽しがたいほど美しく優雅な稲田 (soo schoone en heerlijke rijstvelden) や、ありとあらゆる果実 (allerleij boom ende aerdvruchten) とともに、その真骨頂を現し始める。オンガランには、おおよそ300から400の世帯が住んでおり、(王への謁見に向かう) 高貴な旅人の全てに、旅費と宿泊の便宜を提供するよう義務づけられている。これらの便宜は、奴隸的な恭順をもってきわめて丁重に用意され、この義務に違う場合は体罰を課せられるために、彼らは私から何らの対価も前もって受け取ることが許されなかった。」

ウンガランを通過してからの道筋の描写は、下記のとおりである。

「ウンガランからは、道は高地を越えて山々の間を通過し、右側つまり西側にかなり高い山地を望むようになる。道とこの山地の間には、少なくとも2.5ないし3マイルの幅の谷がある。この谷は一面に稲が植えられており、高い山地から流れ下る無数の川によって潤されている。これらの川はそこでたがいに合流し、ダマック (Damack) 川に流れ込んでいる。ここからは、村の数がいちだんと多くなり、ときには一時間に3つから4つの村を通過する。これらの村はみな、土地の特徴に応じて (nae de constitutie der landen) 表現された奇妙な名前をもっている。6マイル前進したところで、チャンディ (Chiandi) あるいはそのもう少し先の、オンガランよりも大きくて人口も多いサラティガ (Salátiga) の村に到着する。これらはいずれも農業で生計を立てている。ス

マランからここまでに、信じ難いようなジャティール（Jatij）つまりチークの森林を通過する。高く、また並外れて黒く育ったその樹幹からは、ジャワについての記述に言われているとおり、幅3～3.5フィートを下回らぬ数枚の板を挽くことができるし、あるいは梁を切り出すこともできる。」

ここで、一面に稲が植えられている谷として記録されているのは、ウンガランからバウエンを過ぎ、Rawa Peningの湖の東側を道が迂回していくあたりの盆地部の景観と考えると間違いあるまい。ウンガランからサラティガまでの区間に、そのような広い谷と多くの集落が存在したと考えられる場所は他にないからである。「高い山地」と記されているのは、ムルバブ山とテロモヨ（Telamaya）山、ダマック川と記されているのはおそらく、Rawa Peningから北流してデマック地方に至るKali Tuntangのことである。

以上、きわめて簡潔ではあるが、当時のウンガラン近辺の様子をほうふつとさせる貴重な記録と言えよう。17世紀のウンガランがすでに、注目すべき美田の広がる稲作地帯であったことがよく分かる。また、ウンガランに至って初めて、ジャワの自然と農村の景観が真価を示し始めるという指摘が、その後約200年後のブレイケルの記述ともほとんど一致していることもたいへん興味深い点である。ウンガランは、エコロジカルに見ても、まさにジャワの北海岸（パシール Pasisir）と内陸部（ペダラマン Pedalaman）の境界点に位置する場所なのである。

そこで問題は、この当時ウンガランに存在した「美しく優雅な稲田」が、どのような性質の田であり、どのような稲作が営まれていたのか、ということである。この点については、上記の大木氏の論文が、ひとつの推論を示している。すなわち、ウンガランを含め、フーンズ（大木氏の表記ではクーンズ）がマタラムの王都までの3か所で記述した稲田はいずれも谷筋の田であり、「これらの稲田は谷川や泉の水を利用して簡易灌漑を施した水田を中心に、低湿地での湿地水田や水を得られない傾斜地での陸稲（常畑、焼畑）、天水田などが混じ

っていたのではないか」というのである⁽⁵⁾。筆者もこの推論の内容自体には、さしあたり異論がないが、実証の手続きの問題として、フーンズのわずかな記述からこれだけのことを結論するのは、どうにも無理ではないかという感想は付け加えておくべきだろう。

さて、筆者が疑問に感じることのひとつは、その先のくだりで大木氏が、「ただし、山間の谷筋で水田を作るとすれば、棚田の連続となるはずであり、オランダ人の一般的傾向として、まずこの棚田の光景に着目するのが普通である。この記述が全くないことを考慮すると、クーンズの見た見事な稲田が水田であったと断定することはできない」とされている点である。まず、「水田を作るとすれば、棚田の連続となるはず」という大木氏の推論は、現地の地形から判断して妥当とは言えない。すでに記したように、ウンガランの盆地へ入ってから南へバウエンとの境に至るまでは、盆地の中を緩やかに高度を上げるとは言え、おおむね平坦な道筋であり、今日でも沿道の水田地帯には人目を引くような棚田の景観は見られない。(写真1, 2をも参照。これは、バウエン以南サラティガまでの街道筋についても同様である。)今日ウンガラン一帯で、連続する棚田の景観が得られるのは、大通りから離れて、西にウンガラン山腹へ登るいくつかの枝道の谷沿いか、すでに述べたように、西北方向ヘグヌンパティ、ポージャ方面への街道に入った場合に限られる。しかし、当時マタラムの王の派遣した護衛(兼監視)の従者つきで王都への道中を急いだフーンズが、これらの場所に寄り道したとは、もとより考えられないことである。従って、棚田に関する記述がないことは、これらの稲田が水田ではなかったと推論する根拠には全くなりえないのである。

もうひとつ、筆者が不可解に感じるのは、これより前の箇所で大木氏が、「彼〔フーンズ〕は沿岸の港町スマランからウンガランまでの比較的平坦な土地については、チークその他の高木に覆われていることだけを記し、稲については全く触れていない」⁽⁶⁾と記されていることである。これは、3つの点で筆者に

は納得できない。第1に、スマランからウンガランまでは、フーンズ自身が記しているように、当時の旅人にとって1日かかりの「前山」越えの道、すなわち丘陵や台地の上の道であって、「比較的平坦な土地」を行くわけではない。従って、この部分の記述を、沿海地帯の平地の記述のように読むことは決してできないのである。第2に、「チークその他の高木に覆われている」というのは、上に訳出した文章の最後の部分に拠られたものと思われるが、前後関係から明らかなように、これはスマランからウンガランまでの区間について限定された記述ではない。第3に、最も気になるのは、「稲については全く触れていない」と述べられている点である。確かに、作物としての稲や稲田についての記述はない。しかし、上記の訳文で傍線を付したように、住民が稲作を営んでいるという指摘は、2箇所にもわたってはっきりとなされているのである。

従って、上記のフーンズの記述は、大木氏の言われるのとは全く逆に、スマランの町やウンガランの盆地に入る前の丘陵地帯でも、稲作は行われていたことを示すものと読む他はない。しかし、繰り返すまでもなく、「美しく優雅な稲田」という表現が登場するのは、ウンガランのくだりになってからである。このことは何を意味するのか。ウンガラン以前の場所では稲は、畑やせいぜい天水田でしか作れなかったのに対して、ウンガラン盆地ではすでにかなり整備された灌漑田が存在した、と解釈するのが最も自然であろう。そして、このような美田の景観がまさにウンガランから始まる、と彼が記していることから推して、すでに17世紀のジャワ島内陸部では相当広範囲にわたって、灌漑田による稲作が行われていたと解釈すべきではないか、と筆者は考える⁽⁷⁾。

ウンガラン地方の水田耕作が古くから相当の発達をとげていたであろうことは、付録Bのプレーケルの統計で、この地方の水牛の保有頭数がきわめて多かったことから、ある程度推測できる。また、1860年代にもウンガランが米の産地として知られていたことは、第I節2項で引用した『蘭印地理・統計辞典』の記述からも窺うことができる。しかし、それ以上にここで問題なのは、

それ以後今日までの人口大増加の時期に、ウンガランの稲作がどの程度の発展を遂げたか、である。

8—2. 20世紀のウンガランの稲作およびその他の食料作物生産

上記の問題について興味ある判断材料を提供しているのは、1910年代後半のジャワの食糧生産農業の状況を郡別に明らかにした『ジャワ・マドゥラ農業地図』⁽⁹⁾の統計である。この統計から、ウンガラン郡および同郡が属していたサラティガ県に関するデータを取り出し整理すると、表15、16が得られる。まず表15から見ると、この時代のウンガラン郡の人口密度は中部ジャワ全域よりもやや高かったにもかかわらず、その水稲作付面積比は逆に中部ジャワ全域に比べてやや低めであった。そのうえ、ウンガラン郡の水稲単当収量はきわめて低かったから、人口ひとりあたりの水稲生産量は、中部ジャワ全域の平均値の6割にも満たない有様であった。このことは、当時のウンガラン郡では、もはや米の域内自給はとうてい不可能であり、人口の多くが稲作以外の資源や収入に依存して生活していたことを、間接的ながら示すものである。

表15 ウンガラン郡の水稲生産状況 (1910年代後半)

地域	A 面積 km ²	B 人口 (1920) 1,000	B/A 人口密度 (1920) km ² あたり	C 水稲作 付面積 (1) 100ha	D 水稲総 生産量 (1) 1,000t _ン	E 収穫面積 ha当収量 (1) 100kg	C/A 水稲作 付面積 比 %	D/B 1人当 水稲生 産量 kg
ウンガラン 郡	233.1	86.0	369	64.91	8.20	13.94	27.8	95
サラティガ 県	1,015.9	413.0	407	333.8	40.4	15.46	32.9	98
中部ジャワ 全域	37,578.1	13,079.0	348	11,280.4	2,275.5	20.46	30.0	174

(1) 1916—20年の平均値。

(出所) *Landbouwatlas van Java en Madoera; Deel II, Weltevreden, 1928, pp. 9-23, 52-65* より算出。

表16 ウンガラン郡の主要食料作物面積（1910年代後半）

地 域	主要7作物作物面積および構成比 (%) ⁽¹⁾							
	単位	水稲	陸稲	トウモ ロコシ	キャッ サバ	サツマ イモ	大豆	落花生
ウンガラン 郡	ha	6,491	436	3,738	3,174	1,194	20	804
	%	40.9	2.7	23.6	20.0	7.5	0.1	5.1
サラティガ 県	ha	33,378	2,518	25,670	10,907	4,751	486	3,174
	%	41.3	3.1	31.7	13.5	5.9	0.6	3.9
中部ジャワ 全域	1,000ha	2,960	483	1,668	643	236	161	197
	%	46.6	7.6	26.3	10.1	3.7	2.5	3.1

(1) 1916—20年の平均値。

(出所) 表15に同じ。

さらに表16のデータは、水稲以外の作物を含めて、主な食料作物の作物面積を見たものである。一般にこの時代の中部ジャワでは、水稲以外の作物の作物面積がかなりの比率を占めていたが、この傾向はウンガラン郡においてはいっそう顕著であったことが分かる。とくに目立つのは、トウモロコシ、キャッサバの2つの作物のウェイトの高さである。このような状況が、19世紀にも見られたであろうことは、第I節で引用した『蘭印地理・統計辞典』が「(ウンガラン山の)山麓はトウモロコシの畑に覆われている」と記していることから充分推察できる。それ以前の状況についてははっきり分からないが、第IV節で述べたように、ウンガラン山中腹に位置し歴史の古いニャトニョノ村では今日でも畑作が重要な役割を果たしていることから考えて、盆地の低平部から離れた山腹の一角では非常に古い時代から畑作が行われてきた、と見て間違いのないであろう。先に引用したフーンズが、ウンガラン山は「おおむね山腹の高所まで耕されている」と記したのは、このような畑作地の存在を指したのでであろう。(もっとも、17世紀にすでに、新大陸原産のトウモロコシがこの地方で広く植えられていたかどうかは、はなはだ疑問である。)

さて、それでは現在は事情はどうであろうか。表17～19のデータが現在のウンガラン郡およびクレブ郡における稲作とその他の主要食料作物生産の状況を伝えてくれる。まず表17は、両郡の1980年における田畑面積を計上したものである。水田については、灌漑施設の種類別に統計が作成されている。「技術的灌漑」(irigasi teknis)とあるのは、灌漑設備の全構造物が永久建造物であって水量計測装置を備えたもの、「半技術的灌漑」(irigasi setengah teknis)とは、やはり永久建造物によるが水量計測装置を備えていないもの、「簡易灌漑」とは永久建造物によらない灌漑施設のことである。一般に、前二者は政府の公共事業省によって建設、管理される大規模な灌漑施設、「簡易灌漑」は多くの場合、村や農民自身によって作られた小規模な灌漑施設に対応すると考えてよい。ここで注目されるのは、両郡の水田で最も面積が大きいのが「簡易灌漑」による水田であり、「技術的灌漑」による水田はきわめて小面積に過ぎないことである。このことは、19世紀以降今日まで、この地域では政府による灌漑投資があまり行われず、水田の多くは、村や農民による伝統的な灌漑方式に委ねられてきたことを物語っている。かつては美田の景観を誇る先進的稲作地帯であったにもかかわらず、20世紀の統計では水稲単当収量の低い地域として現れる最大の原因は、この点に求められるのではないかと思われる。おそらく、かつてのオランダ植民地政府にとって、ウンガラン地域は、米作地帯としてよ

表17 ウンガラン郡およびクレブ郡の田畑面積 (1980年)

	水 田 (灌漑種類別, ha)				合 計	畑 (ha)
	技術的 灌 漑	半技術的 灌 漑	簡 易 灌 漑	天水田		
ウンガラン郡	120.7	345.4	830.4	296.2	1,592.6	1,408.4
ク レ ブ 郡	435.8	931.7	1,139.3	1,082.1	3,588.9	2,512.6

(出所) *Kabupaten Semarang dalam Angka 1980*, Kantor Statistik Kabupaten Semarang, 1980, p. 18.

りも、コーヒーなど、いわゆる高地作物のプランテーション地帯として経済的意義をもつ、と見なされたのであろう。

次にこの表で注目されるのは、ウンガラン郡よりも相対的に高地に位置するクレブ郡では、天水田が相当の比率を占めること、また両郡とも相当広面積の畑地を抱えていることである。これは、現在のこの地域の農業においても、灌漑に依存しない天水耕作や畑作が重要な役割を演じていることを示している。

以上の点は、表18、19の生産統計の特徴にも明瞭に現れている。まず表18からは、先に見た1910年代後半の場合と同様、今日のウンガラン地域の農業においても、キャッサバとトウモロコシの生産が大きなウェイトを占めることが分

表18 ウンガラン郡およびクレブ郡の主要食料作物生産（1980年）

	水 稲 ⁽¹⁾ ha トン	キャッサバ ha トン	トウモロ コシ ha トン	サツマイモ ha トン	落花生 ha トン	大豆 ha トン
ウンガラン郡	2,417 7,721	567 6,605	1,054 1,831	81 1,095	169 243	2 1
ク レ ブ 郡	2,222 7,401	1,454 16,540	865 1,667	315 3,875	333 536	11 5

(1) 両郡ともに、陸稲の生産はなし。

(出所) *Kabupaten Semarang dalam Angka 1980*, Kantor Statistik Kabupaten Semarang, 1980. pp.102-103.

表19 ウンガラン郡およびクレブ郡の主要食料作物の ha あたり生産量
(1980年, トン)

	水稲 ⁽¹⁾	キャッサバ	トウモロコシ	サツマイモ	落花生
ウンガラン郡	3.19	11.64	1.74	13.52	1.44
ク レ ブ 郡	3.33	11.38	1.93	12.30	1.61
中 ジャ ワ	3.94 ⁽²⁾	9.6	1.61	7.1	0.99
全 ジャ ワ	3.98 ⁽²⁾	9.8	1.55	7.4	0.91

(1) 乾燥籾。(2) 陸稲を含めた平均値。

(出所) 表18から計算。中ジャワ、全ジャワは *Statistik Indonesia 1982*, pp.196-206.

かる。盆地中央の低平地における水田耕作と山腹の高地における畑作の併存という構造には、現在でもほとんど変化がないのである。次に、表19からは、この地域の稲作の単当収量が依然として他地域よりもかなり低いこと、これに反してキャッサバ、トウモロコシ、サツマイモ、落花生の4畑作物の単当収量は、他地域よりも相当に高いことが分かる。17世紀から19世紀半ばまでの記録から窺われたのはちょうど逆に、20世紀のウンガラ地域は、いわば畑作に比較優位をもつ地帯に変化したと言ってよいであろう。

以上の事実は、19世紀末から今日に至る時期のウンガラ地域では、稲作は地域の経済発展を主導する産業としての役割を果たしておらず、増加人口の扶養という点でもあまり大きな役割を果たさなかったことを示唆する。他方、「農業インボリューション」理論で重要な役割を割当てられている砂糖キビ生産もまた、この地域ではほとんど行われなかった。すでに引用した1860年代の『蘭印地理・統計辞典』の記述が、当時ウンガラ郡に製糖工場がひとつだけ存在したことを伝えているにもかかわらず、ジャワの砂糖生産が絶頂を迎えた1920年代には、この地域にはひとつの製糖工場も存在しなかった。今日でも、この地域で砂糖キビが作付けされた耕地を発見するのは困難である。

これらのことから考えて、この地域の村落社会が19世紀以降示してきた海綿状の人口吸収力を、「農業インボリューション」理論の諸概念によって適切に説明することは困難である。一般的に言えば、人口増加に対する村落社会の対応様式のさまざまなパターンをもたらす根本要因は、農業生産の生態システムそれ自体ではなく、村落内部の社会関係の性格ではないか、と筆者は考えている。この過程で、稲作は重要な役割を演じるかも知れないが、その意義はあくまで副次的であると考えべきであろう。場合によっては、稲以外の作物の生産が重要な役割を果たすこともありうるだろうし、商工業、さまざまなサービス活動など農業外の種々の経済活動が決定的な意義をもつ場合もありうるだろう。ウンガラの場合、稲作以外の食料作物生産に加えて、植民地時代にはプ

ランテーションの存在がもたらす雇用や所得の機会が重要であったかも知れない。また、幹線道路沿いに位置するという立地条件から考えて、運輸、商業の諸活動が地域の経済発展に果たした役割が早い時期から重要であったということも十分に考えられる。さらに、現代になれば、大都市スマランの近郊という位置からして、種々の都市的産業がもたらす雇用効果がきわめて大きくなっていくはずである。いずれの経済的要因が重要であるにせよ、それらはいわば外生要因であって、同じ村落社会のなかに人口を収容しつづけるメカニズムは、まずその社会的枠組み自体の中に探し求める必要があるのではなからうか。しかし、それは当面この論文の課題の範囲を超えている。別の機会に別の形で論じてみたいと考える。ここでは、ジャワの村落のもつ膨張的な人口増加パターンを実例に即して検証しえたこと、それがふつう想定されるような稲作農業の生態学的特徴によっては解明しきれないことを指摘しえただけで足れり、としておかねばならない。

- 1 C. Geertz, *Agricultural Involution; Processes of Ecological Change in Indonesia*, Berkeley, 1963.
- 2 R. V. Goens, “Reisbeschrijving van den weg uijt Samarangh, nar de konincklijke hoofdplaets Mataram.....” dated 1656, reprinted in *Bijdragen tot de taal-, land- en volkenkunde van Neerlandsch Indië*, 1856, IV, pp.307-350.
- 3 大木昌「ジャワ稲作史序説——ジャワ史における農民の移動と伝統稲作——」『南方文化』13, 1986年。
- 4 R. V. Goens, *op. cit.*, pp.307-308.
- 5 大木昌, 前掲論文, 32ページ。
- 6 同上, 31ページ。
- 7 大木昌氏は、前掲論文の中で、18世紀のファレンティンの著作 (F. Valentyn, *Oud en Nieuw Oost Indiën*, Vol.4, Dordrecht, 1726) の付図を用いて当時の・中東部ジャワの稲作地帯の分布を論じ、ブランタス川[デルタ地帯やマタラム (今日のジョクジャカルタ周辺地域) では稲作は行われていなかったのではないかと]という旨の推論をされている。しかし、このファレンティンの地図に稲穂の記号で記さ

れた主要稲作地帯には、マドゥラ島の大部分や、東ジャワの南海岸沿いの丘陵地帯が含まれるなど、今日我々のもっている常識から考えて首をかしげるような点が少なくない。この根拠の不確かな漠然たる絵図から上記の推論を行うのは、いささか勇敢すぎるというのが、筆者の偽らざる印象である。

8 *Landbouwatlas van Java en Madoera; Deel II, Weltevreden, 1928.*

結びに代えて

以上の事例研究から、19世紀以降ジャワの村落が被った大きな変化のいくつかの重要な側面が明らかになった。

まず初めに、次の2つの側面が指摘された。ひとつは、19世紀初めまでの古村落を合併させて進められた政府の政策の結果としての、行政村落の形成である。もうひとつは、今日なお行政村落の下位に位置する区や小集落のレベルでの自然発生的居住単位としての、古村落の存続である。この意味で、19世紀以降ジャワの村落は、2つのレベルの異なる社会組織に分裂したとも言える。すなわちひとつは、かつてオランダの植民地統治者や学者たちが「村落公共団体」(*dorpsgemeente*)と言いならわした、行政上のフォーマルな組織であり、もうひとつは、おおむね古村落と地理的同一性を保全しているが、自治的な行政体としては認知されなかった小規模な集落である。ジャワ村落の社会経済的性格や、その歴史的变化を論じる場合、これら2つの、次元の異なる「村落」組織の間の区別を、我々はつねに念頭に置かねばならない。

この論文で強調した第2の点は、19世紀以降の村落人口の著しい膨張である。これは、複数の古村落を統合して形成された行政村落についてばかりではなく、古村落との継続性をおおむね維持している区レベルの集落についても妥当する。私見では、この同一村落内部でのきわめてフレキシブルな人口吸収の歴史的事実は、ジャワの村落の顕著な社会的特質を反映している。これまでの通説的な見方では、この人口吸収力の根源は、水稻耕作の生態システムの特徴から説明

されることが多かったが、ウンガラン地域での検証の結果は、これとは異なる説明要因が必要であることを示唆した。これは、今後の比較史的研究の大きな課題である。

この論文ではまた、ウンガラン地域の事例に即して、いわゆる耕地の「共同占有」の形成と解体過程について、若干の予備的考察を加えた。それは、おそらく19世紀の前半に賦役や租税の強化を契機に拡大したものであるが、古村落に内在した共同体的社会関係を歴史的先行要因とすることなしには成立しえなかったであろうこと、19世紀末以降は、賦役の消滅や租税制度の変貌、そして人口増加に並行する村落の変質とともに、次第に形骸化の道をたどり、1960年以降は最終的に消滅したというのが、当面の仮説的結論である。

以上の成果を踏まえて、今後しばらく筆者が取り組んでみたいと考えている仕事が2つある。ひとつは、19世紀初めから今日に至るまでの、ジャワ村落や耕地「共同占有」制の性格や起源に関する膨大な論争史を批判的に整理し、筆者自身の観点から総括する作業である。もうひとつは、村落構造と土地所有の19世紀以降の歴史的变化を、農業における技術や生産関係の変化と関連づけながら、いくつかの特定の地域の実例に即してトレースする作業である。この場合、可能なかぎり、これまで筆者が行ってきた農村調査による現状研究の成果と補い合う形で問題をとらえていきたいと思っている。これらについては、今後順次、研究の結果をまとめていく予定である。

付録A 19世紀初めのウンガラン郡における村落名一覧表
 (アルファベット順, 括弧内は原史料の記載順序, 綴りは原史料のまま。)

A - K

Abblak	(90)	Gamber Sawet	(101)	Karang	(22)
Aglik	(160)	Geboegan	(162)	Karang Anjer	(11)
Assem	(10)	Gebook Goenoong	(72)	Karang Assem	(166)
Babadang	(88)	Gebook Joerang	(71)	Karang Doeren	(178)
Bandaran	(2)	Gedang Ganak	(103)	Karang Goenoeng	(58)
Bang Lee	(165)	Geger Salam	(69)	Karang Jatie	(182)
Banyoe Kidoel	(100)	Geger Weroe	(188)	Karang Jiwo	(29)
Banyoe Koelon	(99)	Gembongang	(175)	Karang Joeran	(59)
Banyoe Manik	(16)	Genook	(111)	Karang Taloon	(179)
Bedje	(180)	Getas	(135)	Karang Tenga	(30)
Bekakag	(149)	Gientoengan	(161)	Karangan	(38)
Belon	(25)	Glagal	(132)	Kawis Bolo	(92)
Bender Desog Goenong	(79)	Glowa	(189)	Kayoengan	(26)
Bender Doeko Goenong	(78)	Goenoong Patie	(113)	Ke Boerikan	(195)
Bergas Kidool	(168)	Gowongan	(36)	Ke Jombon	(98)
Bergas Lor	(167)	Grogol	(13)	Kebon Kliwong	(197)
Berkanang	(146)	Jati Jajar	(23)	Kebon Mangis Joera	(82)
Bibis	(151)	Jatie Gebrong	(104)	Kebon Ombo	(186)
Blanten	(112)	Jatie Sarie	(85)	Kebonan	(18)
Boeboor	(156)	Je Mangal	(193)	Kedawoong	(6)
Boegangang	(110)	Jelok	(190)	KeDompon	(191)
Branga	(141)	Jetis	(153)	Kemalon	(114)
Branjan Jaran	(74)	Kabo Rikan Doeko	(144)	Kenankan	(32)
Branjan Jaran Lor	(75)	Kali Boetak Joeran	(81)	Kepoelan	(17)
Delik	(157)	Kalie Alang	(109)	Kepok	(136)
DeLug	(15)	Kalie Belang	(169)	Kepok Joeran	(83)
Derkilo	(138)	Kalie Dodol	(3)	Keyi Joeran Demang	(65)
Dersoeni Goenoon	(119)	Kalie Kassir	(42)	Keyi Joeran Pladak	(64)
Dersoeni Joerang	(120)	Kalie Peepe	(7)	Keyi Mijen Joeran	(63)
Diwag	(27)	Kalie Poetjong	(51)	Klayoe	(67)
Dliwang	(91)	Kalie Sarie	(87)	Kletok	(140)
Doeko	(24)	Kalie Tenga	(84)	Koentjang	(196)
Doeko Kidool	(158)	Kalisai Goenong	(77)	Kolang Kaleng	(171)
Doeko Penkol	(68)	Kapoendong Poetie	(106)	KraDinan	(176)
Eeloog	(8)	Karaman Goenong	(61)	Krajan	(1)
Emplag	(145)	Karaman Joeran	(60)	Krettek	(97)

付録A (続き)

L - W

Lahar	(139)	Pesewan	(37)	Soereng	(86)
Larang	(130)	Petoong	(49)	Soesoekan	(46)
Leemboon Kidoel	(174)	Pieyer	(45)	Soko	(95)
Leemboon Lor	(173)	Pilahan Goenong	(76)	Sroemboong	(143)
Lemabang	(177)	PoAren	(107)	Sroewen	(194)
Lempoejang	(164)	Poetattan	(108)	Sroto	(48)
Lepen Sonten	(28)	Pontjol	(54)	Srotto	(187)
Lerep Demmang	(137)	Randoe Goentin	(102)	Teedjo Krajan	(155)
Lollos	(134)	Randoe Goenting	(19)	Tegal Melik	(163)
Lorg	(96)	Rawie Tenga	(44)	Terwidie	(125)
Manik Mojo	(123)	Rembel	(133)	Tiego Werno	(94)
Maroeten Koeloon	(121)	Rowo	(39)	Tjandie	(89)
Maroeten Wetan	(122)	Rowo Doeko	(41)	Tjemo Galor	(117)
Miejen Doeko	(105)	Sabrangang	(126)	Tjemo Kidol	(118)
Moending	(192)	Sedaijoe	(154)	Tjempo Goenoong	(73)
Moending Kidoel	(52)	Seginie	(183)	TjerBonang	(50)
Moending Lor	(53)	Sekoeneer	(181)	Tjienkregan	(33)
Moental Doeko	(150)	Selo Gemoeloong	(4)	Tjongol	(172)
Nogo Sarie	(43)	Semboenang	(93)	Toepo Joerang	(62)
Padang	(14)	Sendangan	(142)	Toog Marang	(47)
Pakalongan Koelon	(34)	Sendeng	(20)	Toog Poeder	(31)
Pakalongan Wetan	(35)	Sentonno	(152)	Troeko Kidol	(115)
Pakientellan	(147)	Sewakoel	(5)	Troeko Lor	(116)
Pakoentjeng	(55)	Sewoelo Koeloon	(185)	Waroe Dojong	(124)
Pala Langang	(127)	Sewoelo Wetan	(184)	Winong Lor	(148)
Pandeang	(131)	Sigoogt	(40)	Woejel	(170)
Pedag Pajoon Wetan	(12)	Sikoero	(159)	Wonno Sarie Koelon	(128)
PegaJa	(21)	Sirotto	(9)	Wonno Sarie Wetan	(129)
Penkol	(66)	Soemoer Joeran	(57)		
Penkol Mijen	(70)	Soemoor Goenceng	(56)		

付録B 1846年のウンガラン郡村落一覧表(アルファベット順)

村落名(1)	No.(2)	人口	水牛	馬	村落名(1)	No.(2)	人口	水牛	馬				
	世帯		牛			世帯		牛					
Ampel gading	7	16	44	16	3	6	Njatljono	53	120	364	31	44	9
Babadan	58	65	248	15	34	5	Padompon	75	51	142	9	23	6
Banyoemanik k.	3	22	66	14	11	1	Pakintelan	23	36	122	46	0	9
Banyoemanik w.	2	27	97	49	28	17	Pakoentjen	41	40	133	26	5	5
Begaja	84	34	133	8	12	4	Pakoetan	86	28	103	6	5	3
Bekakak	87	33	128	40	2	6	Pandegan	12	18	57	15	7	2
Bekarang	21	57	235	44	0	5	Pareng	46	31	116	10	27	2
Bender	34	32	117	21	8	3	Patemon	4	19	66	26	0	5
Benglee	66	69	240	16	26	5	Pekalongan	59	193	728	70	37	30
Bergas kidoel	79	136	463	26	26	8	Pilahan	32	17	61	8	8	4
Bergas lor	73	277	920	52	41	30	Pingkol goe-	19	15	50	11	3	2
Berut	38	12	40	11	5	2	noeg						
Blanten	50	12	41	5	7	2	Pingkol goe-	31	13	42	11	3	2
Branggah	55	15	70	8	4	2	noeng						
Brangdjang	30	26	85	18	13	4	Plalangan	10	74	159	46	19	6
Boeseikan	78	10	31	3	6	1	Poedak pa-	24	64	207	52	30	10
Dessunie	13	22	64	20	2	4	ijong k.						
Diwewak	82	66	235	15	22	5	Poedak pa-	25	41	161	49	50	7
Djatidjadjar	83	118	428	33	42	7	ijong w.						
Djatisahari	89	20	64	5	0	5	Poetatan	47	17	50	7	0	2
Djelok	74	86	234	22	28	6	Poetri	56	28	107	10	9	1
Djeroek wangi	90	117	432	102	14	14	Randoe goen-	85	64	217	24	40	7
Dliwang	49	18	60	5	2	3	ting						
Doijong	17	18	65	15	8	2	Rowo (Ngrowo)	72	12	43	3	3	3
Geboegan	65	99	277	15	14	4	Sekaran k.	6	95	355	124	0	5
Geboek	35	13	33	11	4	3	Sekaran w.	5	68	246	113	0	4
Gedang anakh	60	226	757	90	73	22	Sendangan	54	48	153	19	15	3
Gedawang	1	78	306	48	35	4	Sewakoel	27	26	93	32	43	2
Gembongan	70	73	253	20	30	6	Sigoek	43	48	189	49	16	4
Genoek	48	60	198	28	5	3	Sirep	52	123	395	42	29	5
Gerwerroe	67	110	325	25	29	5	Sokoo	51	45	140	22	9	4
Gintoengan	63	61	196	12	9	4	Sroemboeng	81	41	123	10	8	3
Goengoeng pati	11	225	606	149	83	10	Sroewen	77	25	87	12	14	5
Gogik	64	30	123	17	11	3	Soemoer goe-	28	140	488	105	24	7
Kali alang	61	97	320	13	19	8	noeng						
Kali boetak	20	8	36	12	0	3	Soemoer djoe-	29	165	472	86	35	11
Kali dodol	40	31	117	17	17	5	rang						
Kali kassir	42	58	197	57	10	7	Soesoekan	26	144	523	174	26	9
Kali poetjang	44	13	51	14	0	1	Tegal gawak	37	9	40	10	0	2
Kali saban	62	109	367	32	33	5	Terwidie	18	13	47	10	3	3
Kalisidie	33	34	105	34	6	3	Tjandi	57	92	302	25	19	4
Karang gening	88	29	111	23	4	5	Tjanggal	71	24	82	8	10	2
Kebon kliwon	80	70	219	22	25	4	Tjimanga	15	66	205	58	23	5
Kedjie	36	45	176	38	15	2	Troeko	16	12	35	12	3	2
Lenmattang	69	90	297	24	27	5	Woedjil	68	162	519	30	57	11
Moending	76	90	302	26	46	5	Wonosahari	9	13	46	9	0	2
Moeneng	45	17	66	17	0	1							
Moental	22	58	181	12	0	2							
Mroenton	14	40	161	36	4	6							
Ngijo	8	77	328	141	3	7	合計	5959	19929	3048	1529	527	
Ngoengroengan	39	570	1813	142	36	39	平均	66	221	34	17	6	

(1) k. = koelon, w. = wetan. 綴りは原資料のまま。(2) 原資料の記載順。

ジャワ村落史の検証

付録C 1987年の旧ウンガラン郡該当地域の区名一覧表（アルファベット順）
 （括弧内は所属行政村名）

Ampelgading	Kalialig	Krajan (Ungaran)	Rejosari (Genuk)
Babadan	Kalianyer	Krajan (Wujil)	Rejosari (Ngijo)
Banaran	Kaligawe	Kretek	Sabrangan
Bandaran	Kalikopeng	Kuncen	Salakan
Bangsewu	Kalipasir	Kutan	Saren
Bantardowo	Kalirejo	Lemahbang	Sedayu
Begajah	Kalisari	Lempuyang	Segeni
Bender Desa	Kalisegoro	Lengkong	Sekalongan
Bender Dukuh	Kalisidi	Lerep	Sekebrok
Bengkle	Kandri	Lewono	Sembungan
Blanten	Karang Geneng	Lorong	Sendangputri
Branjang	Karanganyar	Malon	Sendangrejo
Candirejo	Karanganyar Kidul	Manggihan	Senden
Cemangguh Kidul	Karanganyar Lor	Manikmoyo	Setinggen
Cemangguh Lor	Karangbolo	Mijen	Sewakul
Cemanggal	Karangjati	Mojo	Setoyo
Cepoko	Karangsari	Mranggen	Si Krangeng
Cerbonan	Kaum/Dampyak	Mrunten Kulon	Sidorejo
Compok	Kebon Kliwon	Mrunten Wetan	Sikunir (Bergas Lor)
Congol	Kebon Manis	Mundingan	Sikunir (Gunungpati)
Delik	Kebonan	Muneng	Silowah
Delik Rejosari	Kebonombo	Muntal	Sipol
Derbalan	Keji	Ngabean	Siroto (Candirejo)
Dersuni	Kemloko	Ngablak Bugangan	Siroto (Nyatnyono)
Diwak	Kenangkan	Ngaglik	Siroto (Pagersari)
Dliwang	Kepil	Ngimbum	Siroto (Susukan)
Dombo	Kepoh Kalibelang	Nglarang	Siroto (Gunungpati)
Dung Wadas	Kepok	Ngrembal	Sirowo
Gebug	Kliwonan	Pakintelan Barat	Siwarak
Gebugan	Kradenan Baru	Pager Salam	Soka
Gedanganak	Kradenan Lama	Pakintelan Timur	Srumbung
Gelap	Krajan (Beji)	Parakan	Sruwen
Gemawang	Krajan (Bergas Kidul)	Paren	Sukorame
Gembongan	Krajan (Bergas Lor)	Pekesan	Sumurgunung
Genuk Barat	Krajan (Genuk)	Pengkol	Sumurjurang
Getas	Krajan (Jatijajar)	Perengsari	Suruhan
Gintungan	Krajan (Leyangan)	Persen/Ngasinan	Talun Kacang
Gogik	Krajan (Mangunsari)	Perum. IKIP	Tegalmelik
Indrokilo	Krajan (Munding)	Perum. UNDIP	Tegalrejo
Jagalan	Krajan (Ngijo)	Petung	Terwidi
Jedung	Krajan (Nyatnyono)	Pilahan	Trangkil
Jelok	Krajan (Pagersari)	Prampelan	Truko
Jetis	Krajan (Patemon)	Pundung Putih	Watubulan
Jetis Trawas	Krajan (Plalangan)	Puritan	Watusari
Jongkong	Krajan (Sekaran)	Putatan	Winongsari
Kalialang	Krajan (Susukan)	Randugunting	Wonosari